Ring Star

リングスター PROGRAM

1992 WINTER SPECIAL

OFFICIAL PUBLICATION OF THE ALL JAPAN WOMEN'S PRO WRESTLING

INSIED TWO·SIDED POSTER OF TOSHIYO YAMADA & KYOKO INOUE DEBBIE MALENKO

BULL NAKANO
AJA KONG
BISON KIMURA
KYOKO INOUE
TOSHIYO YAMADA

SUZUKA MINAMI
YUMIKO HOTTA

MANAMI TOYOTA
DEBBIE MALENKO
AKIRA HOKUTO

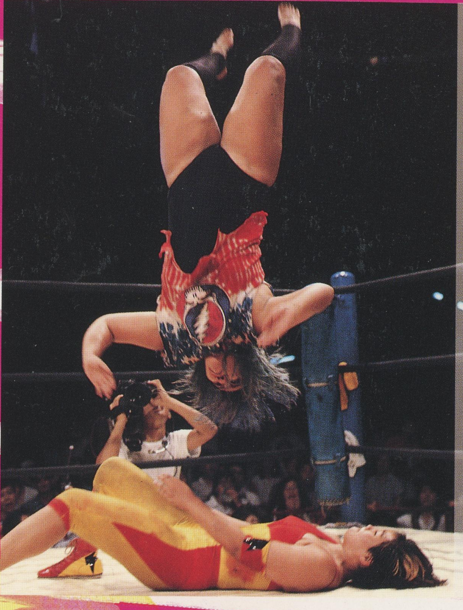
ETSUKO MITA
MIORI KAMIYA
MIMA SHIMODA
MARIKO YOSHIDA
TAKAKO INOUE

新春超進撃!!

自他共に認める〝世界一の女子レスラー〟
それがブル様だ!!

ブル中野

◆WWWA世界チャンピオン



いまやブル中野は〝女子プロレスの象徴〟的存在である。

外から見たら、あらゆるメディアに顔を出しているジャングル・ジャックや井上京子らの方が目立っているように思われるが、プロレスラーはリングがすべて。91年の全日本女子の闘いの歴史を振り返れば答えは一目瞭然だ。

1月、アジャ＆バイソンとの髪切りタッグで快勝！　オープニングの後楽園では北斗に〝悪夢の雪崩式ツームストーン〟を決めて、話題を呼んだ。

4月。久々の全女マット登場で猛威を振いまくるモンスター・リッパーを新技「ローリング・ギロチン」で退治。全日本女子の名誉を守り抜き、WWWAシングル王座の権威をさらに高めた。

9月。夏のジャパン・グランプリを制覇した愛弟子・井上京子の挑戦を受け、20分以上にも渡る熱闘の末、アッと驚くムーンサルトプレスで激勝。メッカ・大宮を熱くさせた。

そして11月……女子プロレス史上初の「金網タッグ・ストリートファイトデスマッチ」にチャレンジ。アジャ、バイソンを血まつりにあげただけでなく、パートナーのリッパーまでも〝伝説の〟金網てっぺんからの4メートル・ギロチンでKO。前年に続いて、プロレス週刊誌の表紙を飾る快挙を成し遂げ、内外に「金網の女王、ここにあり！」を強くアピールした。

大きな試合だけでも、1年間でこれだけあるのだから、〝ブルが主役〟と言いきっても異論はあるまい。だが、それよりも評価されるのは、連日、全女のトップとしてメインに登場し、どんな地方へ行っても、必ずファンを満足させてきたこと。これを1年間やり通すのは容易なことではない。まだまだアジャ、バイソンの時代じゃない！　とブルがウソぶくのも、うなづける話だ。

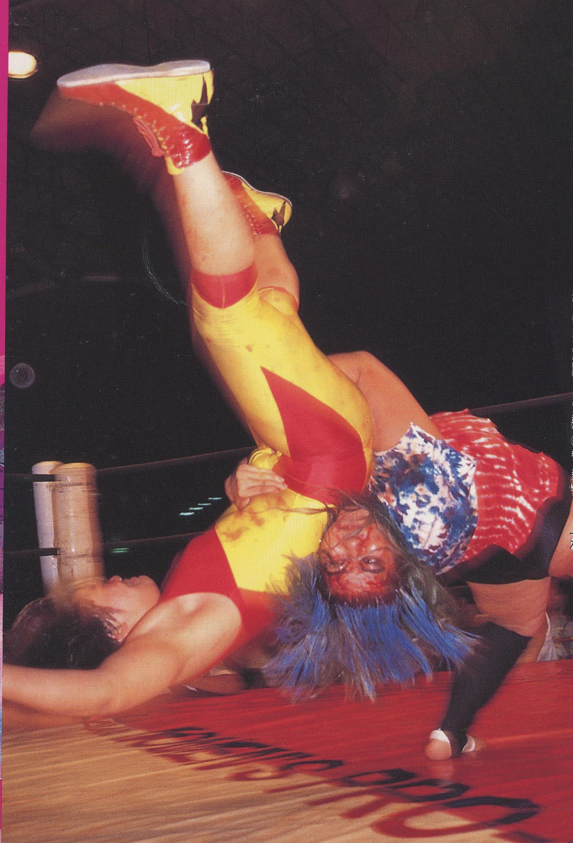
そんな〝女子プロレスの宝〟を一般マスコミが放っておくはずがない。昨年12月には、井上京子とバット吉永を率いて「鉄と鎖のレクイエム」なるCDをリリース。歌手としてデビューをはたした他、初の半生記「金網の青春」を上梓。

『チャラチャラしたバラエティ番組なんかに出てられるかよ！』との主張通り、詞と自筆のエッセイで一般大衆にメッセージを送った。リングを降りても、ストロングスタイル…この一貫性がブル中野の魅力なのだ。

そして92年。ブル中野はデビュー10周年を迎える。普通、10年選手ともなれば、そろそろ下り坂へと向いはじめそうなものだが、ブルにはそんな気配がまったく感じられない。それどころか、まだまだ上昇指向を持ち続けている。松永会長がブルのために25歳定年制を撤廃したのも、当然のことだ。

「絶対にこの座は渡さない。私は常にイチバンでいたいんだ。メインイベンターであり続けるために、四角いリングで勝負したい」

金網タッグの試合後、10年目に賭ける意気込みを語ったブル。リングの上で死ねるなら本望、とまで言い切ったブル中野の92年の、〝死闘〟は言いかえれば〝ブル伝説の終焉〟と背中合わせ……一日たりとも見逃すことはできない―。



PROFILE

本名・中野恵子。S43年1月8日生まれ、埼玉県川口市出身。58年9月にデビュー後、パワー殺法で売り出したが59年暮に極悪同盟入り、半刈りヘアとヌンチャクをトレードマークにダンプ松本のパートナーとして活躍。63年4月には自ら獄門党を結成し、平成2年1月には史上初のヒール世界王者となる。今や全日本女子の象徴ともいえる実力者であり、アジャとの抗争は名物カードだ。

《タイトル歴》

●新人王（S58年）●全日本ジュニア（59年9月～60年2月）●全日本（60年7月～63年1月）●WWWAタッグ（61年8月～62年3月、62年10月～63年1月、63年2月～7月）●オール・パシフィック（元年6月～11月）●WWWAシングル（2年1月～現在まで）●タッグリーグ・ザ・ベスト'85優勝●ジャパン・グランプリ88優勝●91全日本女子プロレス大賞MVP

《得意技》ギロチン・ドロップ、リバースDDT、サンダーファイヤー・パワーボム、回転ギロチン、ラリアット　170センチ、110キロ

BULL
NAKANO

YAMAHA
YAMAHA

1992年、全日本女子プロレス〝辛口〟展望

誰がどうなるか想像できない……

誰がブル、北斗組や山田、井上京子組の本格的結成を予想しただろうか。それこそ数ヵ月程どころか、明日、どうなるかもわからない。数多い団体のなかでも、全日本女子ほど、そのなかで浮き沈みの激しい団体はない、といえる。

今日、メインイベントでも明日は前半（全女の用語のひとつ）に落ちることが決して珍しくない。

「一番じゃなかったら、私が存在する価置はない」とブル中野が本誌のインタビューで言ったのは、そんな〝厳しさ〟をイヤというほど知っているからだ。

90年がアジャの時代だとすれば91年は文句なくブルの時代だった。90年1月に史上初のヒール王座（WWWAシングル）になったが、その政権は予想以上に長い。この記録は胸を張っていいだろう。

とくにブルの場合、全日本女子のフレームにおさまらぬほどの存在感があり、「世界の女子プロレスラーの頂点に立つ」という呼び声も高い。

そのライバルであるアジャは91年、ケガや病気にたたられ、まったく不本意な1年を送った。

もっとも、アジャが本調子を取り戻しても、いつまでもブルとの抗争を繰り返すのは、お互いのためにいいことではない。

「アジャとのタッグ？やってもいいよ、こっちは」とブルは言う。

ファンが望み、全日本女子にとってプラスとなるビッグカードの実現のためには、気持ちを割り切れる〝柔軟さ〟をブルは持っている。このように軍団抗争のワクをとっぱらえば、まだまだ魅力的なカードは沢山あるし、選手の活性化にもつながるだろう。

正現軍では山田の復活が大きい。久々に・大宮で実現した山田VS豊田のライバル一騎打ちはグーンとレベルアップ。

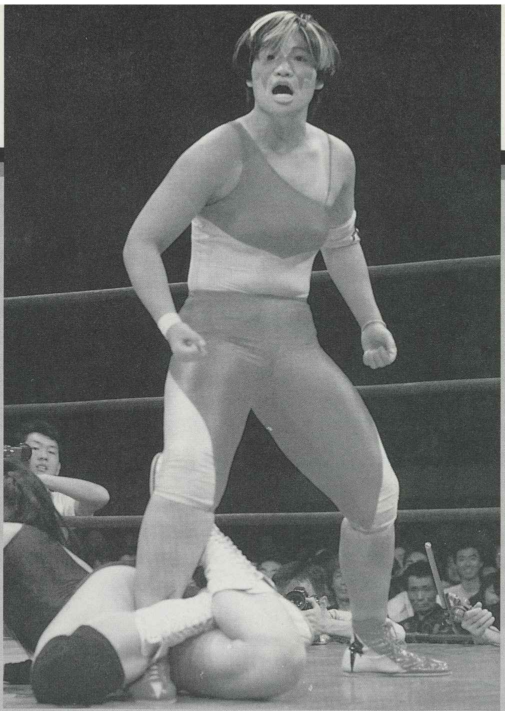
このふたり、闘ってもよし、組んでもよし。山田が井上京子を、豊田が三田をパートナーにして売り出してはいるが、最終的に山田と豊田が合体することを望むファンは多い。きたるべきその日まで、ふたりにはありとあらゆる経験を積んでほしい。

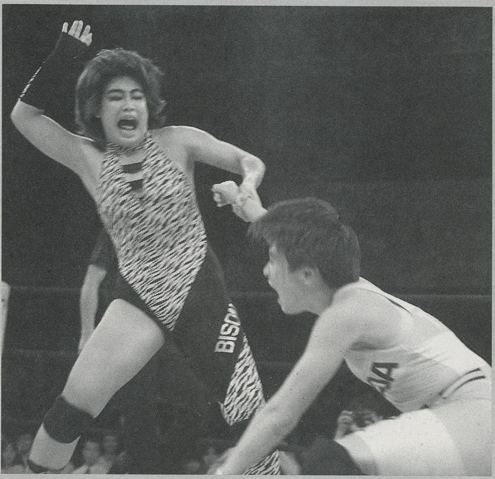
「はっきり言って、山田とアダモ（井上京）は合わない。このペアは失敗だと思う。それよりも私とアダモが組んで山田、豊田組とやった方がはるかに面白いよ」

北斗のプランだ。まったく同感である。リング上のリーダーがブルなら、リング外のリーダーは北斗。その座を譲る気は当分なさそうであり、ましてや引退など考えられない。「私が、私が…」というエゴイズムが、いい意味でアピールにつながっているのだ。

「比べて、みなみと堀田にとっては92年が正念場だ。一番キツイことを言えば、みなみは印象に残るが、ない。これが最大の問題。

乱世マット界の覇者は誰だ!!?





どうしたら、お客さんの印象に残るか、それを考えるべきだ。あとは何も言うまい。

カードに恵まれないこともあるが、そのチャンスをつかむのも自分次第。このまま〝終わる〟としたら、あまりにも寂しい。

92年、もっとも株を上げそうなのはバイソン。ブル、アジャ、北斗に続く〝好位置〟を占めており、WWWAシングルだって十分に狙える〝素質〟の持ち主。

豊田と井上京は、これからのランクアップが至難のワザ。維持することは難しくないが、もっと上がろうと思うと、想像を絶するエネルギーが必要になってくる。

バイソン、山田、豊田、井上京…この4人のなかから次期WWWA王者が出てくる可能性は強いし、そうなれば時代は変わる。

選手層の厚さを誇る全日本女子だが、平成になってからの新人の成長が遅いのが気になる。

期待の一番星は長谷川。ベビーフェースに転向した矢先にケガをして5ヵ月も欠場したのは痛いが、まだまだ巻き返しがきく。

長谷川は、全日本女子のムードに合ったタイプであり、とにかく努力を積み重ねていけば、きっと実を結ぶはず。じっくりと鍛え込みたい〝全日本女子スタイル〟の典型といっていい。

長谷川と同様、いつも気になるのが吉田だ。このふたりには、ひたむきなイメージがある。

「誰かにくっついて上がるタイプと、ひとりで黙々とがんばるタイプがいるけど、吉田は後者。会場に入って、ひとりでポツンとリングにいる吉田の姿をよく見かける。ああいうタイプは楽しみなんだ」

これも北斗の弁。ダブル井上（京子と貴子）との同期トリオは、まさに三者三様。それぞれが独自の道を歩めば、将来が楽しみ。

タイトル戦線に目を向ければ、シングルよりもタッグから〝流れ〟が変わりやすい。つまり、大番狂わせが起こりやすいし、その期待が高いのがWWWAタッグだ。

このベルトを手にすると、まわりの見る目がガラリと変わる。全日本のタイトルは、ある程度のキャリアを積めば手にできるが、世界のつくWWWAタッグはなかなか手が届かない。

一度でもWWWAタッグ王者になれば、引退しても、その歴史のなかで〝光〟を放つ。ぜひ、がんばってほしい。

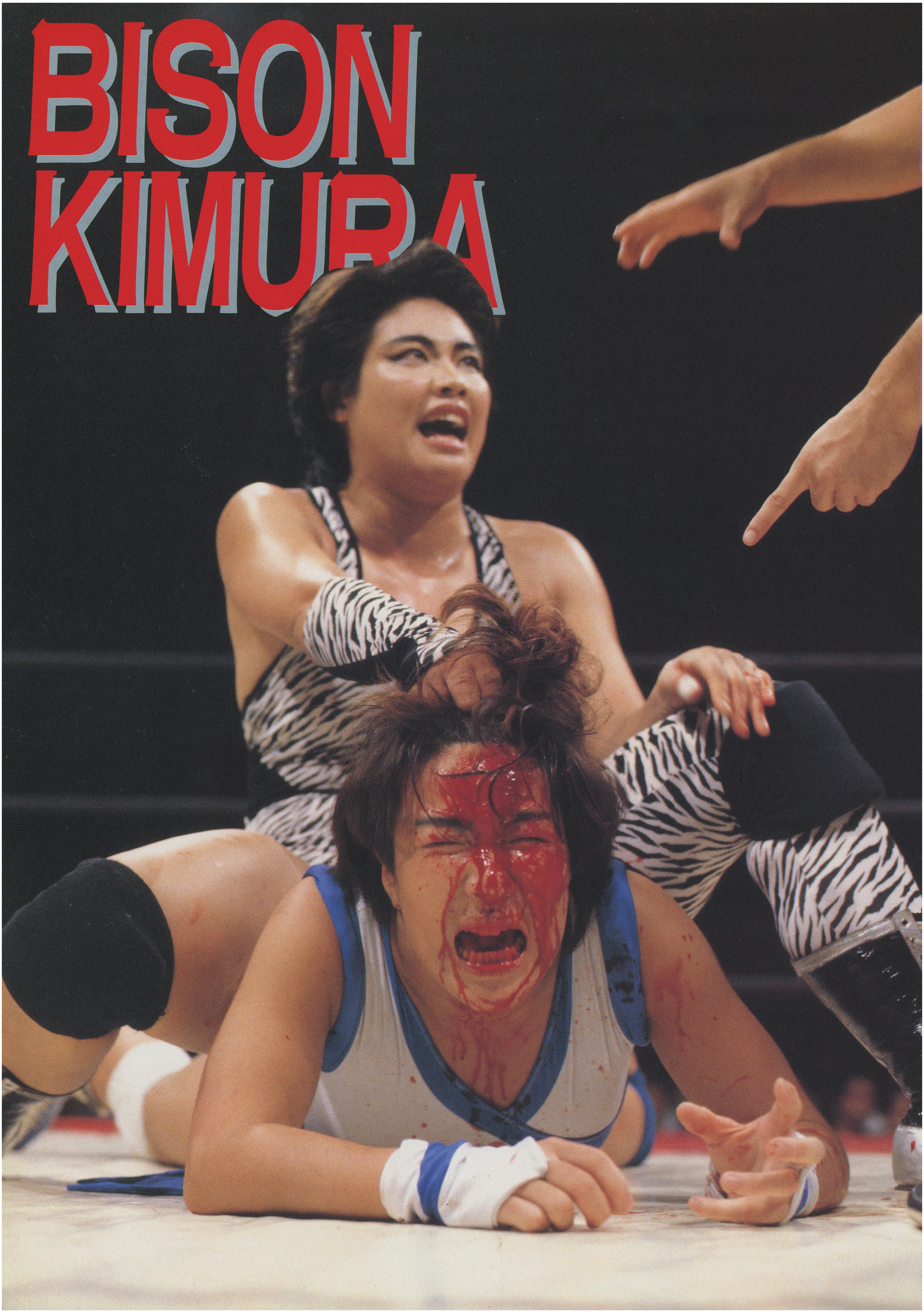
外人はどうか。線の細かったデビー・マレンコは、すっかりたくましくなった。まさしく掘り出し物だったが、ここのリングでは〝なじめる〟かどうかがポイント。なじんできたデビーを、もっとカードの面で生かしてもいいと思う。

さて、ブル、アジャに次いで週プロの表紙を飾る選手はいるのか、いるとすれば誰なのか…。こればかりは私にも全く想像がつかない。

BY 宍倉清則（週刊プロレス編集次長）

AJA
KONG

BISON KIMURA



ブルとの雪辱に肉体は燃える……
平成名物から世界の怪物となった！

PROFILE

本名・宍戸江利花。S45年9月25日生まれ、東京都立川市出身。黒人兵の父を持ち、少女期から空手を習っていた格闘技一筋の文字通りハングリー娘。61年9月にデビューし、何度となく改名したが、キング・コングの娘と称す野獣パフォーマンスで人気急上昇。僚友バイソン木村とのジャングル・ジャックは、獄門党に対抗する軍団であり、ＣＭやＴＶのバラエティでも活躍する〝平成名物〟だ！

〈タイトル歴〉

●全日本タッグ（63年4月～元年1月）●全日本(元年3月～8月）●ＷＷＷＡタッグ（元年12月～2月2月、2年12月～3年11月）●'90全日本女子プロレス大賞ＭＶＰ

〈得意技〉雪崩式パワーボム、パワースラム一裏挙。アジャ・ドライバー、ダイビング・ボディプレス、コング・アタック

165センチ、108キロ

アジャ・コング

足首のネンザ、それに続く急性盲腸炎の手術と、昨年はアクシデントが続き、せっかく自ら宣言して、飛躍の年にしようとした〝アジャ元年〟も不本意なものに終ってしまった。

「しょうがない。盲腸炎は持病のようになっていて、痛み出すと薬で散らしていたが、手術ですっかり治療したから安心だ。今まで腹痛が起るたびにヒヤヒヤしていたのが、その心配がなくなっただけでも、ある意味でのストレスも無くなったわけだから…。足首のネンザは自分の不注意。あれで、せっかくのジャパン・グランプリを棒に振ってしまったけれど、ふだんのトレーニングが、いかに大切かという事が分った。今年は二度と同じ誤ちを繰り返さない」。

盲腸の手術後、僅か4週間で川崎市体育館（11月21日）で僚友バイソンと組み、ブル中野、モンスター・リッパーを相手に繰り広げた金網タッグ・マッチ。主治医の試合出場不可の診断を振り切っての死闘。まさに〝怪物〟の名がピッタリだ。

あの川崎の死闘もそうだが、切開した腹部の糸を抜いた翌日からＣＭ撮影のため病院を抜け出して、スタジオにかけつけ、終ると同時に、何くわぬ顔で病院のベッドに寝ころんでいた。

「約束した仕事を自分の都合で延ばしてもらうなんて…。そりゃあ頼めば事情が事情だけに延ばしてもらえたかもしれないが、そのために、たくさんの人に迷惑が掛かるわけだから…。レスリングの試合をするわけでもないしネ」。

盲腸の手術も普通なら1時間で終るのだが、あの巨体。たっぷり3時間も。主治医が「腹部の筋肉のすごさにびっくりした。やはりレスラーは体の構造が違う」と驚いていたが、アジャに言わすと「違っていて当然。普通の人と同じだったらレスリングなんて出来ないよ」と笑う。

いまや全国的人気のアジャ。盲腸の手術で欠場中は全日本女子プロレスの事務所へファンから容体を問い合わせる電話が、ひっきりなしに続いた。それも遠く九州、北海道からというファンの数も多かった。

「ありがたいことです。毎試合ベストを尽くしてファンに応えたい」

12月15日にはバイソンとのコンビで「炎の叫び」でポニーキャニオンからＣＤも発売したが、仇敵ブル中野と獄門党トリオ（井上京子、バット吉永）の「鉄と鎖のレクイエム」と両Ａ面。言わば全日本女子プロレス実力派集団の歌の競演だが、アジャの体、顔からは想像できない可愛い声が注目を集めている。「レコードはバイソンが主役。自分は脇役です。バイソンは歌が上手ですが、自分はちょっと…。でもブルには、たとえＣＤといえども負けたくないから一枚一枚売るヨ、両Ａ面だから同じ事かもしれないが」。

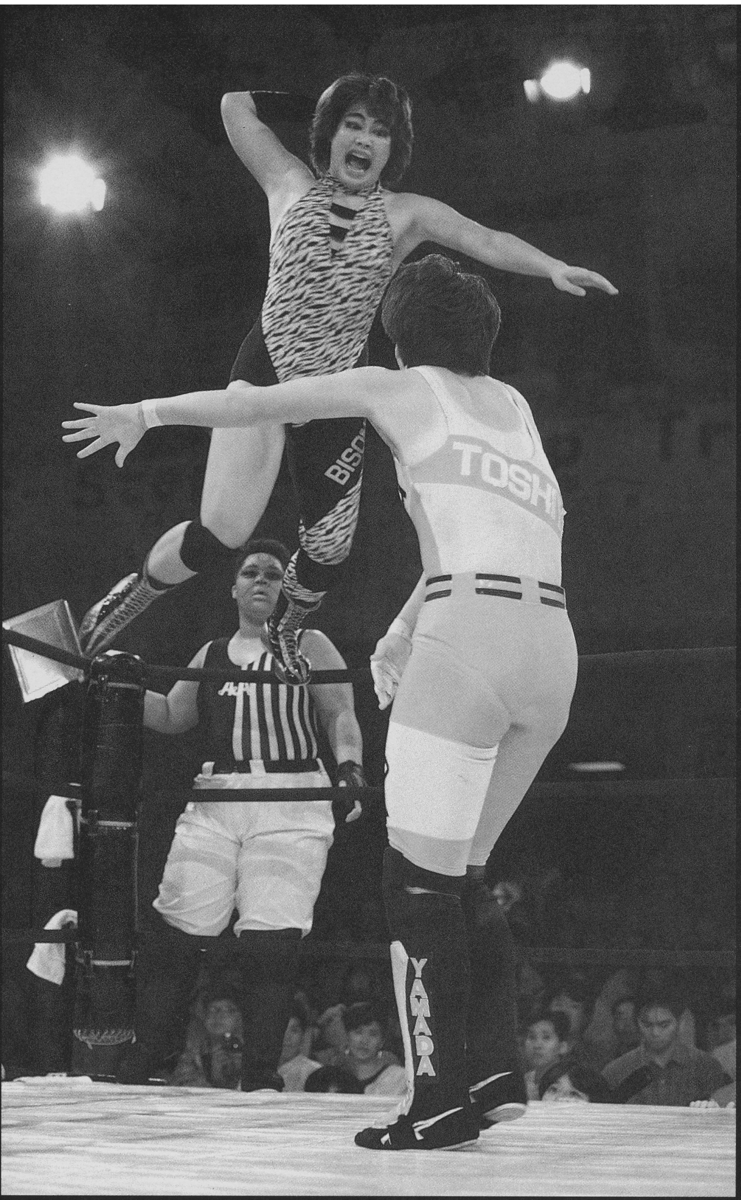
ＣＤもそうだが、ＣＭのプレゼンティーションも多いし、ＴＶのバラエティー番組やクイズ番組への出演依頼も多く、試合の合い間を縫ってトンボ帰りの連続。アジャの強味はアドリブが出来ること。予期せぬ質問にも理路整然というか、ちゃんと筋道をつけて語る。肉体と体力が売り物で、どちらかといえば寡黙派の多い女子レスラーの中では珍しい能辨派。新人時代は皆から『漢字博士』といわれるほど漢字もよく知っていた。

「今年？ そうですね。バイソンと協力して返環したＷＷＷＡ世界タッグの奪回。ブルのＷＷＷＡ世界シングルにも挑戦し、赤いベルトを奪い取る。テクニックではブルの方が上かもしれないが、闘いというのはテクニックではない。自分のことをまだ荒削りといわれるが、荒削りのまま突っ走っていく向う見ずが自分の信條」。

荒削りのまま92年を突走りたいというアジャ。本当の意味で今年を〝アジャ元年〟にする事が出来るのだろうか。アジャが、どんな暴れぶりをするか興味深い年になりそうだ。

炎の叫び！熱き魂のプロレスが天下を取る！

バイソン木村



いま人気沸騰のＪＪコンビの中で、どちらかといえば、アジャの脇役的存在だったバイソンが、着着と力をつけ、オールパシフィックの白いベルトをもぎとって、猛ダッシュで追走中だ。

富山市体育館（10月25日）でのオールパシフィック選手権では男性ファンの〝バイソン・コール〟が会場にこだました。「富山ではテレビ放送も、あまりないし、自分の事など誰も知らないと思っていたのに、あの声援でしょう。ずい分と勇気づけられたし、ベルトを取れたのもファンの声援のおかげです」

フジテレビの長坂アナウンサーが勝利インタビューで「バイソンの目に白いものが光っています。文字どおりの嬉し涙です」と語っていたが、オールパシフィックのベルトには、かつて後輩の豊田真奈美との王座決定戦で敗れた苦い思い出があるだけに、その想いも、ひとしおのものがあったのだろう。

バイソンの信條は何事にも〝一生懸命〟練習も一生懸命なら試合も一生懸命。試合前のガランとした会場で、一人黙々とダッシュを加えたランニングで汗を流しているバイソンを何度となく見掛けたが、表情は厳しく声を掛ける雰囲気など全然なかった。

そして、この練習の事を言われるのを嫌がる。理由は試合前に練習するのは当然のこと。それも自分一人がやっているわけではないし、みんなが時間を分けて練習しているのに、一人だけが目立つのが好きでないからだ。目立ちたがりやの多いプロの世界では珍しい存在だ。

だが、これも試合の事となると別だ。テクニックやパワー、試合運びでほめられるとニッコリする。それだけ毎日の試合に賭けているという事なのだろうし、同時にプロレスの評価はリングの中、観客がレフリー。たとえ技術がまずくても一生懸命やれば、必ずお客さんに通じるという信念に支えられているからだろう。

バイソンの事を不器用な選手という人もいるが、一つのワザを覚えるのにも中途ハンパでは使わず、練習を重ねて自分の物にしてからでないと使わない。いま彼女の得意技の一つにされているケサ斬りチョップも、木の枝や石、鉄柱を相手に努力を積み重ねたバイソンならではのワザだ。あのチョップで何人の選手が胸にミミズ張れをこしらえた事だろう。

ヒールといえば顔などにペンテイングをして、相手を威嚇するのが普通だが、バイソンはベビーフエイスと同じように素顔に近い状態でリングに上がる。この素顔がまた男性ファンにとって魅力の一つらしい。

フジテレビ女子プロレス中継の解説者、デイリースポーツ運動部安部正之氏は「いまやバイソンはヒールではなく、どちらかといえばベビーフェイス。獄門党入りした当時は顔半分を真っ黒にしてリングに上がり、反則などを使っても板についていなかった。アジャとＪＪを結成した当時も強烈な個性を持つアジャの陰に隠れていたが、アジャがケガや病気で欠場してシングル戦が多くなるにつれ、バイソンの人気が高まってきた。彼女のよく言う〝一生懸命〟の試合が観客にも通じるようになった証拠です。いつまでも今の気持ちを忘れず、一生懸命の試合を続けてほしい」とエールを贈っている。

一時は高校時代の友人が続々と結婚をしていくため〝結婚したい症候群〟にとりつかれ、悩んだ日もあったそうだが、いまは「プロレスと結婚しました」とレスリング一筋。その歌唱力を認められ、アジャとのデュエットでポニーキャニオンから出した「炎の叫び」もプロレスをしているからこそのものと割り切っているが、出した以上は一枚でも多く売りたいという。今年はバイソンの年になりそうな予感がする。

PROFILE

本名・木村伸子・Ｓ42年３月９日生まれ、東京都目黒区出身。高校卒業後、一年間のＯＬ生活を経て、61年６月デビュー。新人時代からアジャとタッグを組み、獄門党に属していたた、確執が生じ平成２年秋に離脱。魔性の魂といわれるケサ斬りチョップの乱れ打ちは狂い出したら止まらない。髪切りマッチにより自慢のソバージュ・ヘアを失くなったが、復調し再度ブルの首を狙う。熱心さでは団体一である。

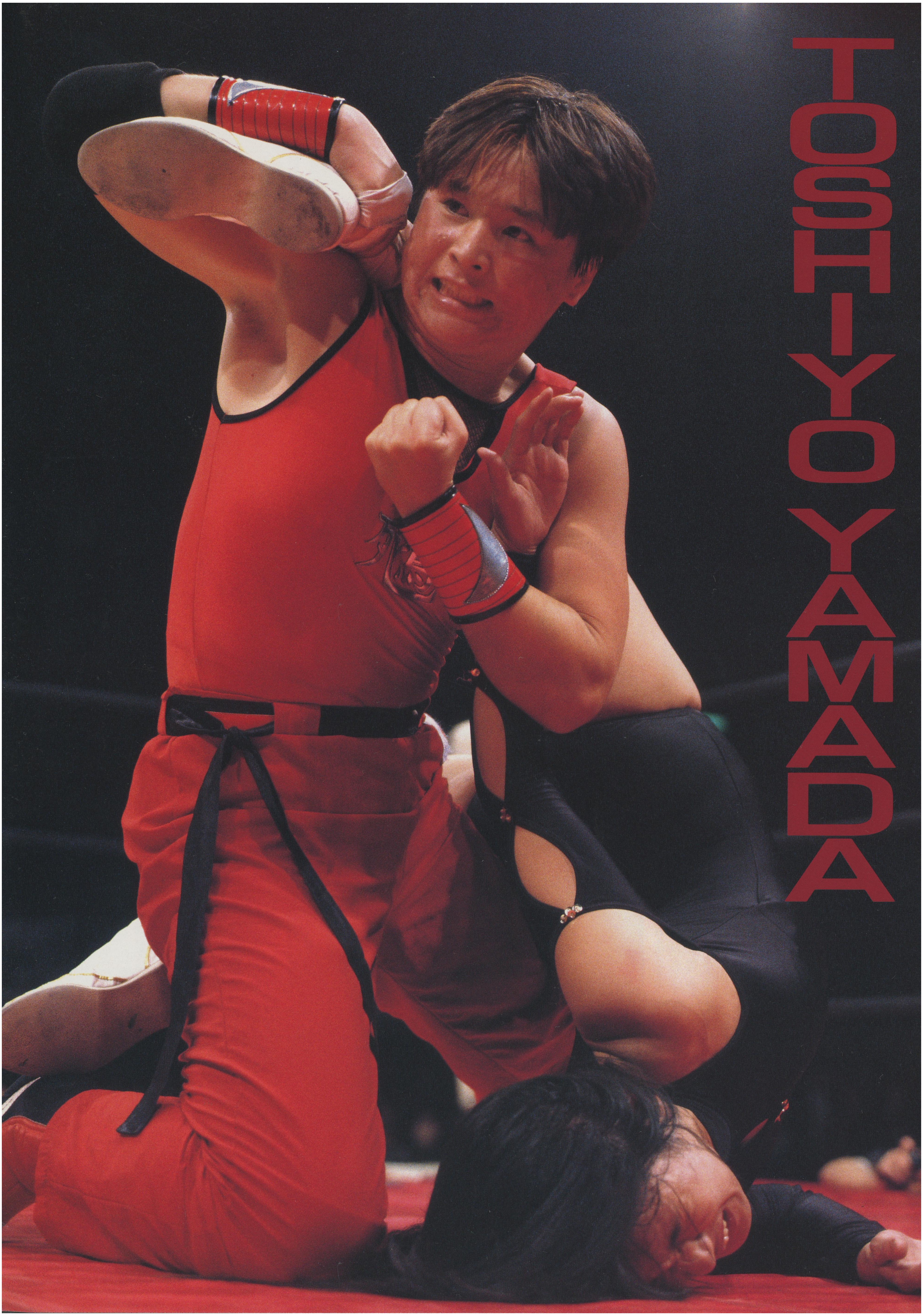
〈タイトル歴〉

●全日本タッグ（63年４月～元年１月）●ＷＷＷＡタッグ（２年12月～３年11月）

〈得意技〉ケサ斬りチョップ、トルネード・スターフレス、バイソン、スペシャル、ダイビング、ヘッドバット、ブリザード

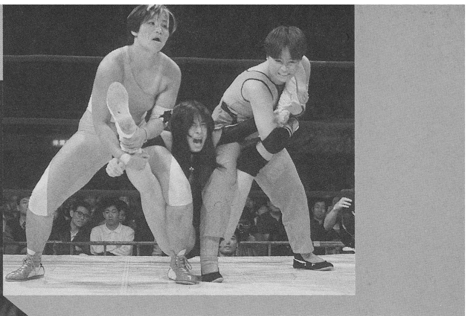
168センチ、75キロ

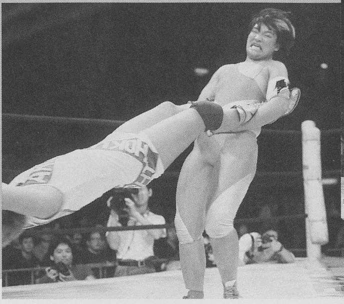
KYOKO INOUE


TOSHIYO YAMADA

キョーコ時代の高らかな幕明け…天才技巧派に今年も針付けだ！

井上京子





全日本女子プロレス新時代の黄金トリオといえば、井上京子、山田敏代、豊田真奈美。山田と豊田が正統派路線の継承者ならば、さしずめ井上は路線を無視した独自の道を突き進む―そう、最も意外性を持ち合わせた、時代の旗手なのである。

昨年のジャパン・グランプリで井上は、山田、豊田、バイソンと先輩相手に、一日三連勝という、とんでもない記録を作り、見事に初優勝した。

それも、ただの三連勝ではなかった。三通りの名勝負を創り出し場内は、〝キョーコ〟コール一色の完全ワンマンショー。

明るさと激しさと兼ね合わせたニューヒロインの誕生に誰もが狂喜し、その存在を満天下に認めさせたのだ。

「誰が一番プロレスのことを考えているか…それが優勝という形で証明できた」と井上は、自信満々に語ったものだ。

このナルシストともいえる発言は、他の選手への警告でもある。同じ、プロレスラーと名乗る限りひたすらプロレスを思考し、体を鍛え上げるのが役目。単にセンスがある、ないの以前に、レスラーとしての義務を全うしなくてはならないし自ら非常ベルを鳴らし、奮気をうながした。

キョーコ・プロレス最大の魅力といえば、どんな相手をも光らしてしまう点だ。だから、けして横綱相撲はしない。相手の良さを最大限に引き出し、その上で料理する。そこには、勝ち負けを度外視した名勝負を生み、闘う充実感を発散させる。

そりゃあプロレスに対する考えに共鳴した相手が理想だが、井上にとって相手は誰でも同じ―といったら極論過ぎるだろうか…？

あの首領（ドン）ブル中野でさえ、「最大のライバルは井上京子だ！」と断言する。そこには、必要悪となっているキャリアとか序列などない。井上の実力を素直に認めるブルもまた、真の実力者だからだ。

ルチャ・リブレの開放感あふれる明るさと秘技、アメリカン・プロレスのパフォーマンス、そして日本スタイルの激しさをミックスされたのが、キョーコ・プロレスの完成型だ。

男女を含め２００人弱といわれる日本のプロレス界で、このスタイルを実践しているのは、井上と獣人サンダー・ライガーくらいのものだろう。プロレスを天職とし、その前提を元に、いろいろなスタイルを応用する。理想的なレスラー像といえよう。

シングル・プレーヤーとして、申し分ない活躍をする井上だが、タッグにおいても頂点に達しようとしている。

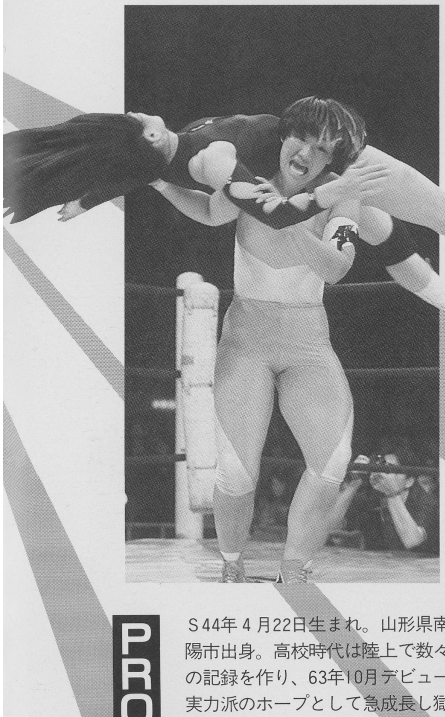
ブルとの最強タッグを解消し、山田とのコンビで再び最高峰を狙う。昨年暮のメキシコ遠征は、二人の絆を強める意味でも重要なサーキットだった。

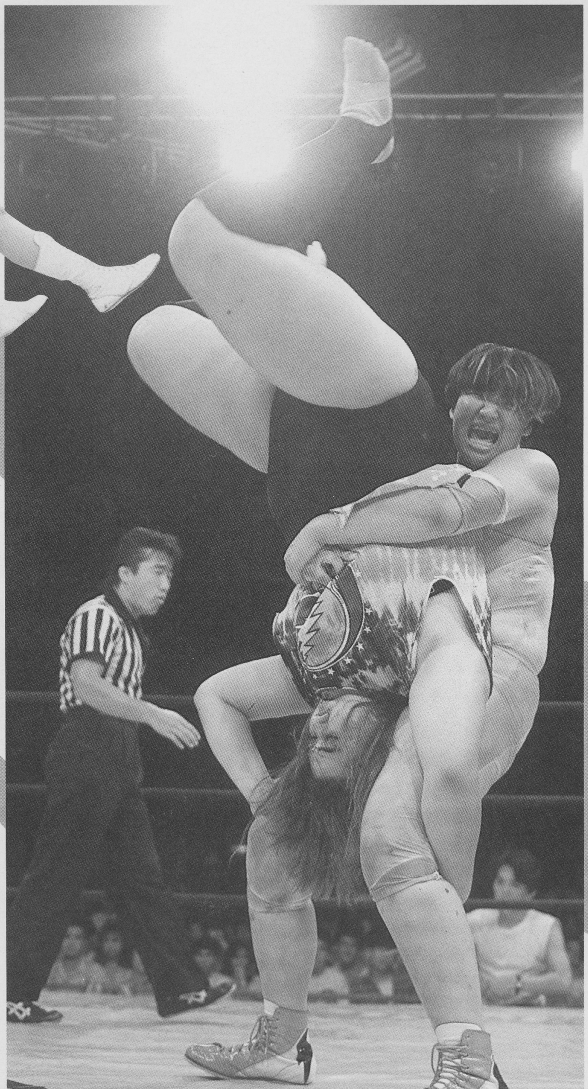
ＥＭＬＬではルーダ（ヒール）で大暴れ。キョーコの名前を日本だけではなく、ルチャの本場メキシコでも大きく広めたのだ。

その止まらぬ勢いで、「タッグリーグ・ザ・ベスト’91」をも制覇。今年は、世界タッグ奪取をめざし王手をかける。

時代は一人のスーパースターで引っ張るよりも、全員一丸の勢力結集に視線が集まる。

だが…もし、誰かが時代をつかむとしたら…この井上京子が最優力候補、秘めに秘めた可能性が、〝オーバー〟する―そんな日がいつかは実現するのだ！





PROFILE

S44年４月22日生まれ。山形県南陽市出身。高校時代は陸上で数々の記録を作り、63年10月デビュー。実力派のホープとして急成長し獄門党に入ってからは、ブルの最良のパートナーとして活躍。そのセンスは〝天才技巧派〟の名をほしいままにし、時代の名勝負マシンである。ジャパン・グランプリ’91では１日３連勝という快挙で初優勝。山田とのタッグでは、メキシコのＥＭＬＬで大人気を呼び、〝キョーコ〟の名を世界に広めつつある。今年は井上中心に回ることは間違いない！

〈タイトル歴〉

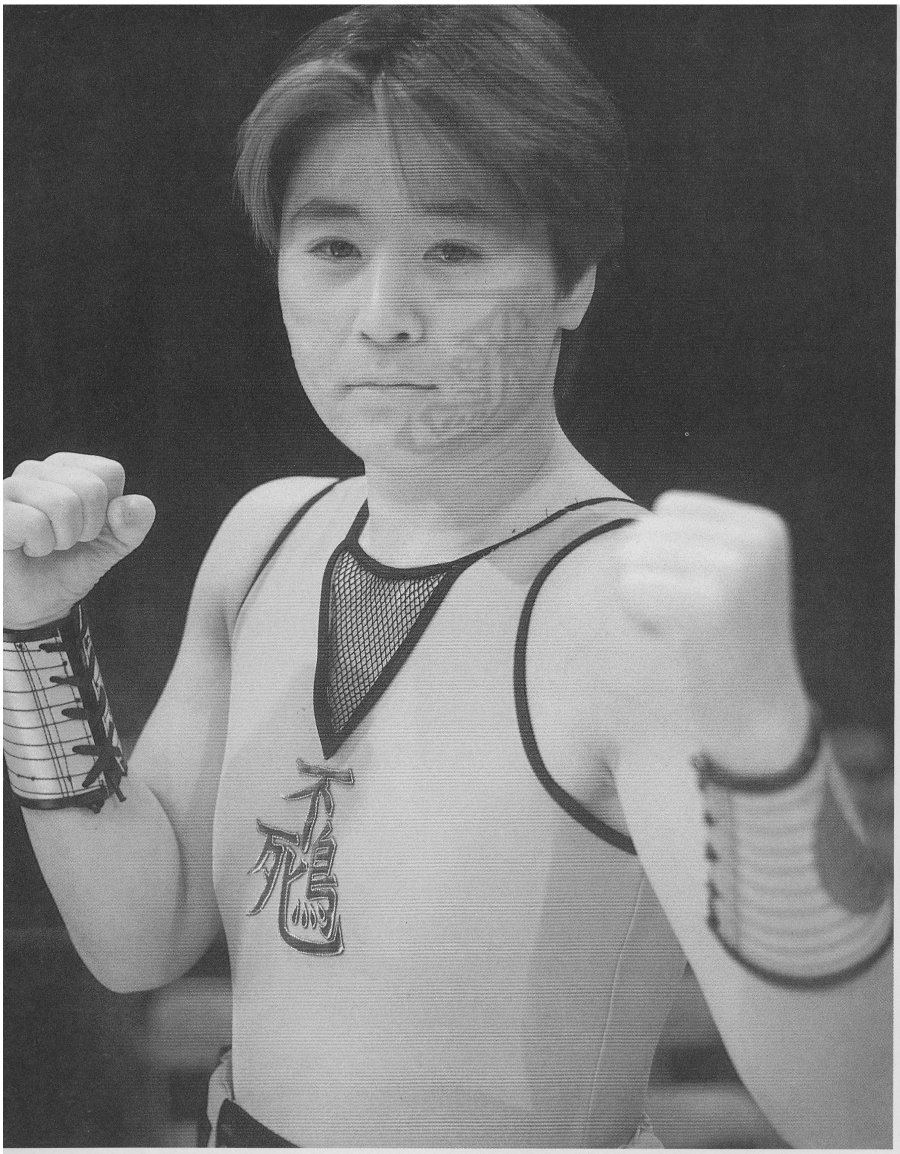
●全日本（２年10月～３年４月）●ＩＷＡシングル（３年８月～現在まで）●ジャパン・グランプリ91優勝●タッグリーグ・ザ・ベスト’91優勝

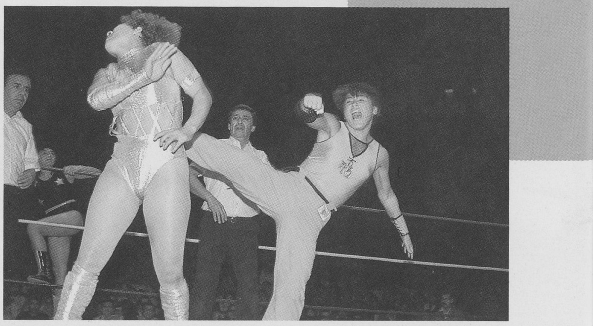
〈得意技〉ナイアガラ・ドライバー、トプ・レベルサ、キョーコ・スペシャル、カンパーナ、ダイビング・エルボー、前転つり天井

166セルチ、75キロ

〝不死鳥〟を胸に
エース見参!!〟

山田敏代





本命エースといわれて久しい山田敏代が今、猛チャージでダッシュし、新時代を掌中に収めようとしている。

昨年11月、約1ヶ月に及ぶメキシコＥＭＬＬマットから、井上京子と共に凱旋、当地ではルーダ(悪党)としてファイトしていたため、これまでのオーソドックスなスタイルからフルモデルチェンジ。

〝不死鳥〟という自らのテーマを顔にペイントし、忍者を彷彿させるコスチュームと積極果敢なキックの嵐…まさに、東洋の神秘として、メキシコ中にその名を轟ろかせたのだった。

このメキシコ遠征は、これまでの甘い雰囲気を立ち消し、心身ともに強い山田に生まれ変わった。時には、地元選手とケンカまがいの闘いをし、周囲から警告を受けることもあった。

それも、これも、今となってはいい経験だった―と回想する。

帰国後の山田は、水を得た魚の如く、大ハッスル。その勢いは止まることを知らず、タッグリーグザ・ベスト’91をも制し、今年は更に大きな勝負を賭ける。

同期のライバル豊田、タッグパートナーであり宿敵の井上京子とこの〝三つ巴〟戦は、全日本女子プロレスの大きな目玉であり、上半期最大の売り物だ。

それぞれタイプは違うが、動きの早さとテクニックの豊富さ、獲物を狙うようなスピリットは他の選手を大きく引き離す―。

特に山田のリングに対する情熱は凄い。一昨年春に、ケイ椎を手術し、医師から「再起不能」を宣言された。この時点で、レスラーを断念すると思われたが、不屈の精神力で克服。

９ヶ月のブランクの末、同年12月には復帰。今だに、首の内部にはプラスチックが入り、固定を余儀なくされている。だから、プロレスに対する思い入れは常人の想像を絶するものだ。

いつも怪我と背中合わせだから「毎日が全力投球!」という姿勢は変わらない。

こんな悲壮感あふれる山田だが、井上京子との合体により、情熱一途のプロレスから、もっと応用の効いた余裕あるプロレスへと変化しつつある。

堀田とのシビアな、キック合戦で再認識された打たれ強さを武器に、時にはフェイントを加え、時には器用さを押し出す。これまでの山田には見られなかった自由な感覚と発想が、充実した肉体から発散されるのだ。

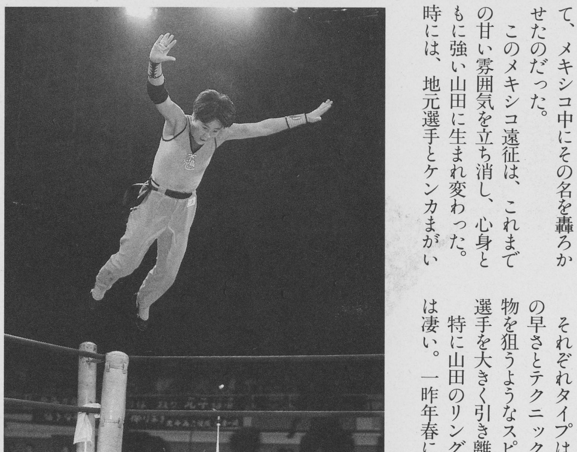
井上京子とのペアは、山田にとってこれ以上ない刺激に違いない、何しろ山田の持っていないプロレスのエッセンスを、井上は全部体内にインプットさせているからだ。

それを巧みに井上はバラ捲くため、常に新しい展開を創造する。山田の闘志に火を付ける、もってこいのパートナーなのだ。

永遠のライバル豊田との出世争いは今年も感動を呼ぶベストマッチを繰り広げるだろう。山田にとって豊田がいる限り、旺盛な勝負魂は燃える一方だ。

お互いの一挙手一投足が気になる対決。全日本女子イズムといわれるストロング・バウトの中心人物であることは間違いない。

首の負傷は遠い過去になりつつある今日、山田は真のエースとして、静かに静かに王道を進む。爆発する日は、いつか…その日こそ新しい時代のゴングが鳴る!



PROFILE

S45年２月27日生まれ、埼玉県浦和市出身。62年７月デビュー、〝千種二世〟と称され一躍人気者となり、同期の豊田との出世レースは注目された。だが、一昨年３月にケイ椎を負傷し引退勧告を受けたが、不屈の情熱と医師も驚く回復力でカムバック。昨年10月には井上京子とメキシコ遠征し、ＥＭＬＬマットでセンセーショナルに登場。〝忍者〟スタイルで大旋回を巻き起したのだった。その努力と練習量は、全日本女子の宝だ。

〈タイトル歴〉

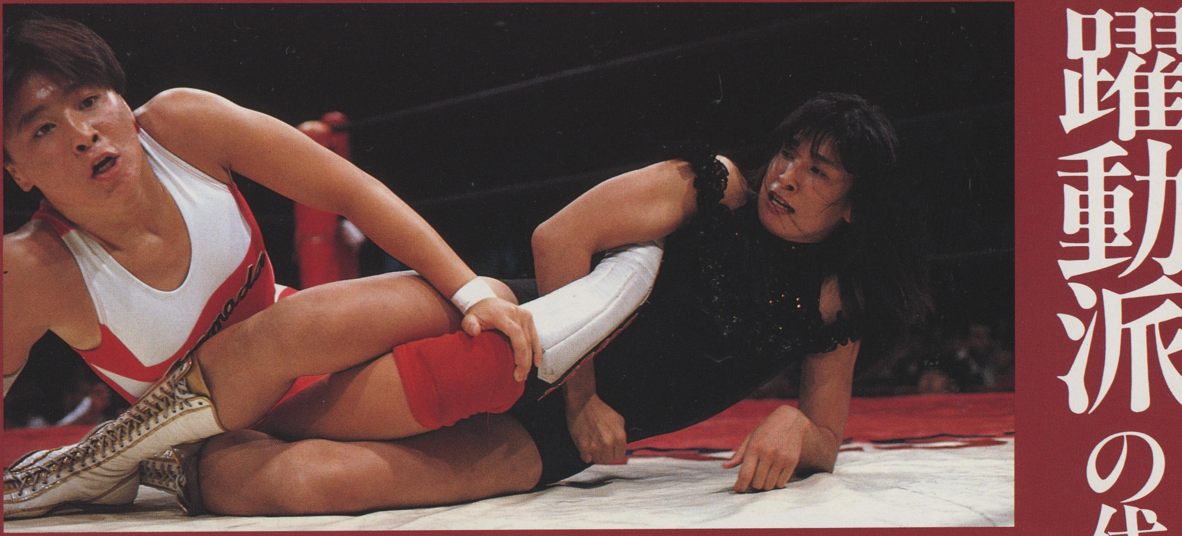
●新人王（S62年）●全日本ジュニア（63年７月～12月）●全日本タッグ（元年５月～２年６月）●タッグリーグ・ザ・ベスト'91優勝

〈得意技〉ジャンピング・ブレーン・キック、サイド・バスター、フロント・スープレックス、バック・ドロップ

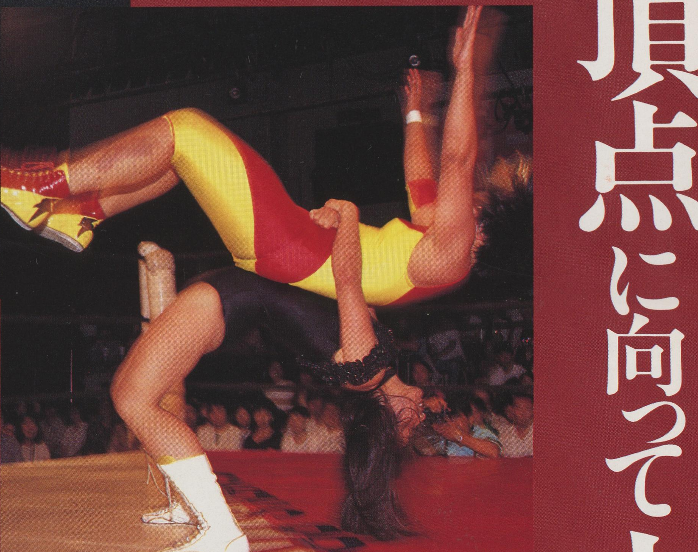
168センチ、65キロ

豊田真奈美

躍動派の代表は頂点に向って大きく翔ぶ!!



〈タイトル歴〉
●全日本（元年11月～2年9月）●オール・パシフィック（2年10月～3年3月）●ジャパン・グランプリ'90優勝
〈得意技〉ジャパニーズ・オーシャン・スープレックス、ジャーマン・スープレックス、ムーンサルト・プレス、ランニング・キック
168センチ、63キロ



PROFILE

S46年3月2日生まれ、島根県益田市出身。62年8月デビュー。柔軟性のある肉体を武器に、止まることを知らない勇猛果敢な躍動感あふれるファイトが最大の魅力。ビッグマッチにその名は欠かせなく、若きエースの一人だ。同期の山田、後輩の井上京子とはこれから、いくつも名勝負を創り上げていくだろう。素朴な、はにかみ屋だが、その素顔が男性ファンの好感度を呼んでいる平成のシンデレラである。

昨年9月、最愛の母を亡くした豊田真奈美。遠い島根県の空の下で、ずっと娘のファイトを見守っていてくれた母…その存在は20歳の豊田にとって、とても大きいものだった。

あまりのショックに、スランプに陥ってしまうのではないだろうか？　そんな周囲の不安をヨソに豊田は気丈にも元気いっぱいのファイト。ハタチの女のコである前に、もう立派なプロレスラーに成長していたのだ。

三田英津子との「ミントシャワーズ」でのCDデビューの晴れ姿も、見せてあげることは出来なかった。オール・パシフィック王座からの転落、ジャパン・グランプリでの惜敗と、あまりパッとしない試合しか見せることしか出来なかった。それが一番の心残り、と豊田は言う。

「私が勝つことだけを楽しみにしていた人だったから…。今でも、毎日、天国から見守ってくれてると思うから〝心配しないで！〟って、胸を張って答えられるような試合をしたい」

以前から「会場に来れないファンは新聞の結果やリーグ戦の星取り表でしか私のことを知ることが出来ないんだから、内容はもちろん良くなくちゃダメだけど、まず勝たなくちゃ！」と勝利にこだわっていた豊田が、またまた勝つことに執念を燃やし始めたのだ。

確かに〝勝利〟という結果に関して言えば、丸腰の現状を見ればわかる通り、決して芳しいものではない。が、試合内容に関していえば、自信をもって太鼓判を押せるだけのものを積み重ねてきた。

記録には残らないが、記憶に残る…そんな言葉が豊田にはピッタリくる。今やトレードマーク(?)になってしまった無口なところも〝リングで勝負！〟を体現しているようで、いい。

そんな豊田が、毎日、会場で歌を唄うようになった。マイクアピールの練習にはならないだろうが〝もう一人の自分〟をアピールする絶好の機会。自然に自分が出せるようになって、その上で歌もヒットしたら一石二鳥だ。

話を戻そう。高角度のドロップキック、驚異のブリッジが産み出すオリジナルのスープレックスなどを駆使して、ファンの心にその名前を深く刻みつけてきた豊田は、同時に絶大な信用を得てきた。ベルトやトロフィーといった形には残らないが、これは大きな大きな財産だ。

その信用をバックに92年、豊田真奈美は大きく飛翔しようとしている。山田とのライバル対決の決着もつけなくてはいけないし、白いベルト、そして赤いベルトへの挑戦だって狙ってみたい。闘いのテーマは山積されている。

他にもアジャ、井上京子、北斗晶らとのシングル対決、北斗との越境タッグの再現など、豊田絡みの好カードは数限りなく頭に浮かんでくる。今や、絶対に欠かせない存在であることの証明だ。

ヒールがトップを独占している現在の全日本女子の勢力地図を塗り替えることのできるベビーフェースは豊田しかいない。誰もが認めるその才能をフルに活かす術を身につけた時、豊田真奈美の黄金時代がスタートする。

MANAMI TOYOTA

TAKAKO INOUE

井上貴子

男性ファンを脳殺する

闘うマドンナ！

待望のレコード「奇蹟の扉」も出したし、イメージビデオもハワイまで行って作った。女子プロレス定番のスター街道を一歩一歩と進んでいる。女性ファンより男性ファンの支持を受けており、そのせいか、男性誌の取材がふえ、去年後半の貴子のスケジュールは、お忙しい毎日だった。

どちらかといえば目立ちたがりやだ。そのうえ、顔に似合わぬ激しい気性の持ち主。高校1年生の時から女子プロレス入りを志し、茨城県の取手から練習生としてジムに通い、オーディションも三度目の正直で高校卒業の直前に合格した。

練習生のころから白い水着で人目を引いたが、今はフリルのついた水着がウリ。リング衣裳も金色ラメのピカピカ。ルックスも派手ならファッションも華やか。それがサマになっているのだからフシギな存在。

本職のプロレスの方も、やっと陽の目が見えるようになってきた。全日本のシングルとタッグの二冠王だが、これを狙うライバルは数多い。すでに一期下の平成元年組が目を光らせて挑戦のチャンスを狙っている。

「後輩が私の持つベルトを狙って挑戦してくるのは当然の事。私も先輩の持つベルトを目標に励んできた。リングに上がれば先輩も後輩もない」と言うが、同期で同姓の井上京子の事になると話し方も変ってくる。

「京子はジャパン・グランプリ91に優勝、IWA世界のベルトを握り、メキシコに遠征するなど現状では確かに一歩先んじられているが、マラソンでいえば、まだ折り返し点にも達していない。これからが勝負。追いつけ追い越せです。絶対負けるものか」ライバル意識をむき出しにするなど、ここらにも持ち前の負けん気の強さがにじみ出ている。

井上貴子をデビュー当時から見続けている三宅フジテレビアナウンサーは「デビュー当時から歌も唄えるレスラーになりたいと言っていましたから、いま、やっと念願が達したというところでしょう。女子レスラーにとってレコードを出すというのは出世コースの一つだが、歌を出したからといってクラッシュのように人気者になれるかとなると、また別の話。本職のレスリングでも力を発揮しないと。井上貴子も、いま、やっと階段を上がりかけたところ。この階段を上がり切るためには、これまで以上の努力が必要になってくる。しかも厄介な事には努力だけでは上がり切れず、ファンの声援や運など、いろいろの要素が一段ごとについてくる。とにかく全力投球で上がりきってほしい」と言っている。

三宅アナウンサーの言う通り、井上貴子にとって、今年は本物になれるか、どうかの正念場だ。そのために必要な事は、まず個性の確立。いわば〝井上貴子らしさ〟の発揮だ。格闘技にしても、芸事にしても最初は人マネから入っていく。この人マネを、どのように消化して自分の物にし、キャラクターとしていくか。それがスターと、たんなる物マネとの違いなのだ。

井上貴子の歌のコスチュームや歌いっぷりを森高千里のノリとか、鈴木保奈美を意識しているという声もあるが、いつの日か、それを井上貴子のノリというふうに切り換えられた時こそが本物だ。

井上貴子は言う。「好きで入った女子プロレスの世界。自分のロマンをプロレスに託したのだから、自分なりに、あらゆる可能性を追い求めていきたい。これまで何度となく、やめようと思った事があったが、その度に、ここでやめたら何もならないと頑張ってきた。まだまだ道は遠く険しいが、悔いのないよう一日一日を大切にガムシャラに進むだけです」

こんなにマジメに語る井上貴子を見たのは初めて。それだけ自分に賭けているのだろう。ファンの皆さんのこれまで以上の声援をお願いしよう。

PROFILE

S44年11月７日生まれ、茨城県取手市出身。少女時代は雑誌のモデル経験もあり、女子アマレスを経て63年10月デビュー。〝立野二世〟を自認し、華やかなプロレスをめざしていたそのアイドル的なルックスに、男性ファンの人気が沸騰し、歌手デビューに加えてイメージビデオも発売された。また昨年４月には井上京子を破り全日本シンブル、そしてタッグの２冠王にも君臨し、ただのアイドルではないことを証明している。

〈タイトル歴〉

●全日本（３年４月～現在まで）●全日本タッグ（３年８月～現在まで）

〈得意技〉オーロラ・スペシャル、フライング・ニードロップ、風車固め、サイクロン・ホイップ、フライング・クロス・アタック

166センチ、65キロ

吉田万里子

ルチャ留学を待ち望むハリキリガール！

MARIKO YOSHIDA

マイペース型の女子レスラーといえば、みなみ鈴香の名前が真っ先にあげられるが、吉田万里子も負けじ（?）とマイペースを守っている。

そんな吉田を思わぬアクシデントが襲った。

足首骨折。

井上貴子とのコンビで全日本タッグ王座を奪取。「タッグリーグ・ザ・ベスト91」へのエントリーも決まり、さあこれから、という時だっただけに悔んでも悔みきれない。

だが、吉田はいたって冷静で、

「せっかくのチャンスなのに、ダッコちゃんには、悪いことしちゃったなあ。すべて私の責任ですから…私が悪いんです」

と、不可抗力の事故であるにもかかわらず、自分を責めて、パートナーの井上貴子を気遣った。ヘタをすると、自分の持ち味であるアクロバティックな動きが封じ込められてしまうやも知れない個所の負傷なのに…。

約2ヵ月の欠場中、同期の2人は大活躍だった。井上京子は山田と共にメキシコ遠征に出かけ、ひと回り大きくなって帰ってきた。

井上貴子も歌手としてデビューし、華やかなスポットを浴びるかたわら、全日本チャンピオンとして、着実に力をつけてきている。

そんな2人の飛躍ぶりを見て、あせらなかったらウソだ。マイペース娘・吉田の心の中は「次は私が飛び出してやる！」という熱い想いでいっぱいのはずだ。

復帰後いきなり、タッグリーグの優勝候補だった豊田&三田に堂堂のフォール勝ち。他のチームとの対戦でも、足を引きずりながらもハッスルプレーでファンを沸かせた吉田。まだ体調は十分ではないが、気持ちはすでに明日に向かって走り出しているようだ。

考えてみれば、新人の頃からケガで泣かされ続けていた。吉田はマイペース人間ではなく、ケガを克服していくことによって、精神的に強くなっていたのかも知れない。こういうレスラーは、ここ一番で信じられないような力を発揮するものなのだ。

もうそろそろ、ただひたむきなレスリングからは卒業しなくてはいけない。獄門党のバット吉永&渡辺智子が全日本タッグのベルトを虎視眈々と狙っているし、長谷川や伊藤の平成元年組も猛チャージをかけてきている。もう追われる立場にいるのだ。ノンビリはしていられない。

一方では〝追う〟立場でもある。井上貴子の全日本王座、あるいは井上京子のIWA世界王座を奪取し、同期に追いつき、さらに獄門党、ジャングルジャックとの闘いの中で、並いるメインイベンターを追い越さなくては…92年は吉田万里子にとって、勝負の年なのだ。

そのためには、ローリング・エルボーやモンキーフリップなどの必殺技に磨きをかけながら、新しい技を編み出していかなくてはならない。オフの日には、ルチャのビデオに釘づけになっているという勉強家の吉田だけに、正月早々、初公開の大技が飛び出すかも…。

PROFILE

S45年2月15日生まれ、広島県御調郡出身。学生時代に体操のキャリアがあり、63年10月デビュー。2年間ほど怪我で悩まされたが、闘志あふれるパフォーマンスとマット運動を生かしたアクロバット技で人気・実力共に急上昇、イキが良く、ひたむきな姿勢は多くのファンのハートをつかむ新世代のホープだ。昨年8月には、モレノ姉妹を破り全日本タッグ王座を獲得している。

〈タイトル歴〉

●全日本タッグ（3年8月~現在まで）

〈得意技〉ローリング・エルボー、エプロンサイド・プランチャ、モンキー・フリップ、カベルナリア

166センチ、65キロ

みなみ鈴香

SUZUKA MINAMI

PROFILE

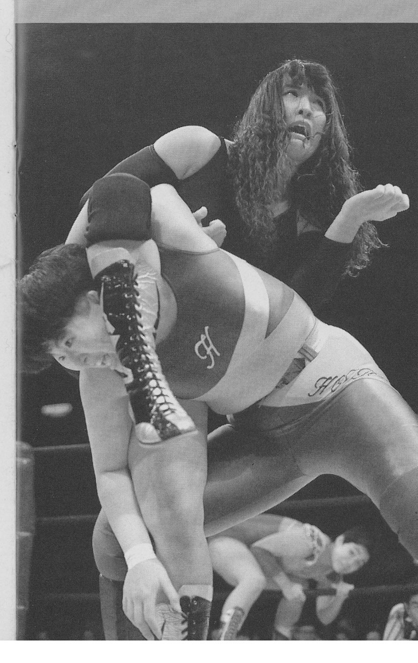
本名・鈴木美香。Ｓ44年４月18日生まれ。千葉県安房郡出身。60年７月にデビュー。そのナチュラルなパワーは新人時代から将来性を買われていたが、ようやく開花してきた感がある。潜在能力は群を抜き正規軍のリーダー的な立場だが、かつては北斗と海狼組で人気を呼んでいた。眠れるみなみが大爆発する時こそ、バイプレーヤーを返上しブルと真っ向勝負に臨む番だ。

173センチ、68キロ

〈タイトル歴〉

●全日本ジュニア（62年12月～63年５月）●ＷＷＷＡタッグ（元年６月～７月、２年２月～12月）●オール・パシフィック（２年６月、３年３月～４月、10月～現在まで）●タッグリーグ・ザ・ベスト'88優勝

〈得意技〉パワーボム、風車式バックブリーカー、ジャンピング・キック、だるま式スープレックス



実力派が大噴火
する年がやってきた

北斗晶のマリンウルフ脱退、ブル中野との合体という大地震で、一番大きな影響を受けたのが、この人―みなみ鈴香だ。

「タッグ・パートナーだったが、シングル戦は何度も闘っており、影響といったって、リングでは所詮一人の闘い。ある意味では、これまでのシガラミから開放されて、ほっとした面もある」

この言葉とは裏腹に北斗の持っていたオールパシフィックの王座に敢然と挑戦、すさまじい攻防戦のうえ、ベルトをもぎとってしまった。せっかくのベルトも初防衛戦でバイソン木村に奪われたが、北斗とのタイトルを巡る争いは激しさを増す一方。

一見、無口で、おとなしそうだが、リングのファイトとなると別だ。１７３㌢の長身を利用したジャンピング・キック、風車式バックブリーカーの威力は相当な破壊力を持っており、テクニッシャンの北斗晶も「あれは効く」と脱帽している。

西脇の引退でパートナーのいなくなった60年同期の堀田祐美子とタッグチーム結成という推測も高まっているが、本人はタッグ戦よりシングル戦を志向している。これも「リングでの戦いで頼れるのは自分一人」という信念のあらわれだろう。

今年の目標はバイソンに奪われたオールパシフィックの奪還とブル中野への挑戦。そのための体力増強が課題。

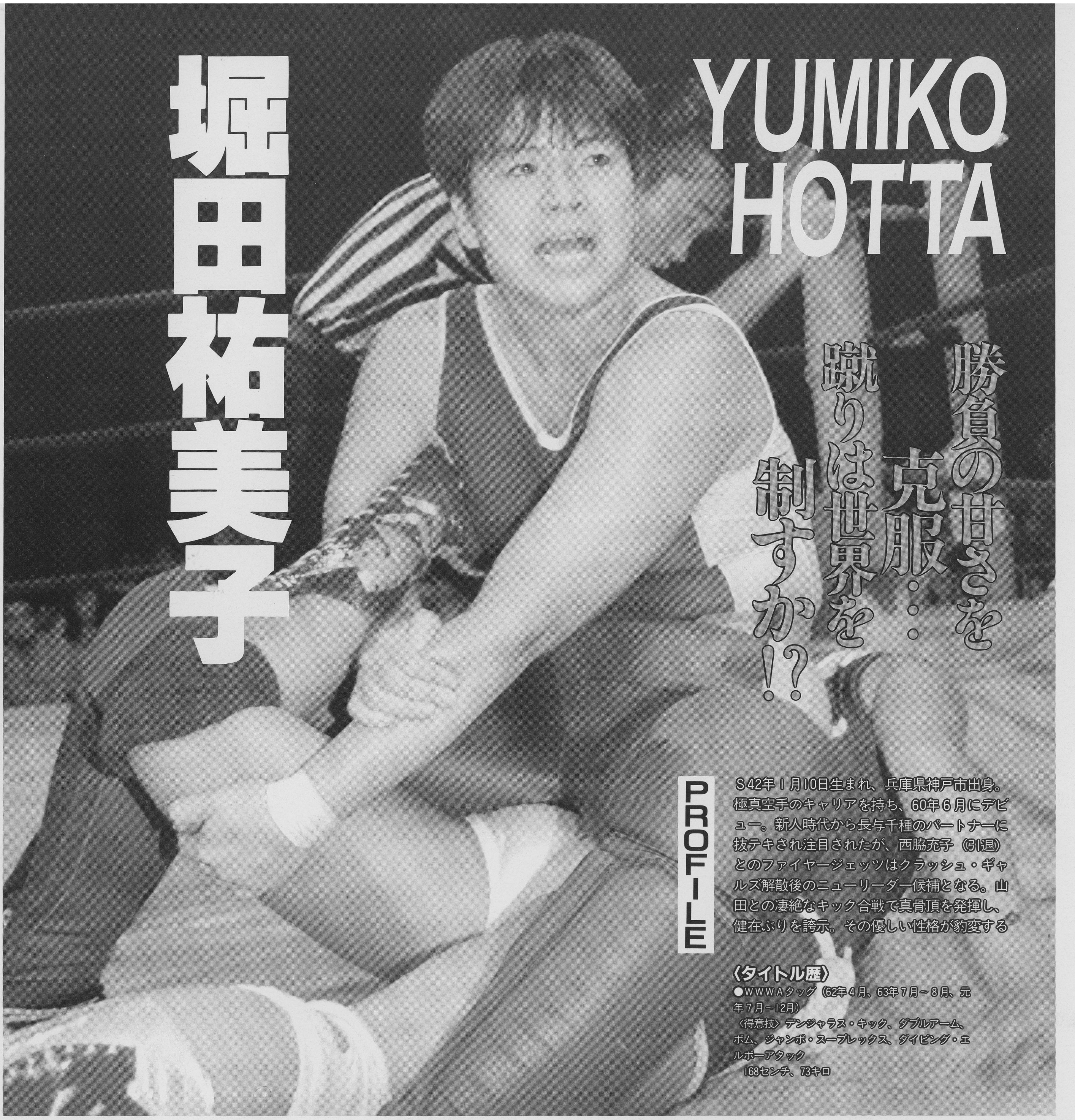
「中野さんには、いつも、あのパワーと体力に圧倒されているが、だからと言ってアナがないわけではない。ウィークポイントも分っているので、赤いベルトに挑戦する。北斗も中野さんへの挑戦を考えているそうだが、北斗より先にベルトを奪い取ってやる」

話のふしぶしで、必ず北斗の名前が出てくる。それだけ裏切られたという思いが強いのだろう。ローン・ウルフになって、かえって目標が、はっきりと決まった「みなみ」。やる気の出てきた彼女の活躍が、全日本女子プロレスのリングを大いに活性化すると同時に、新しい因縁が数々の話題をふりまきそうだ。

堀田祐美子

YUMIKO HOTTA

勝負の甘さを克服…蹴りは世界を制すか!?



PROFILE

S42年1月10日生まれ、兵庫県神戸市出身。極真空手のキャリアを持ち、60年6月にデビュー。新人時代から長与千種のパートナーに抜テキされ注目されたが、西脇充子（引退）とのファイヤージェッツはクラッシュ・ギャルズ解散後のニューリーダー候補となる。山田との凄絶なキック合戦で真骨頂を発揮し、健在ぶりを誇示。その優しい性格が豹変する

〈タイトル歴〉

●WWWAタッグ（62年4月、63年7月～8月、元年7月～12月）

〈得意技〉デンジャラス・キック、ダブルアーム、ボム、ジャンボ・スープレックス、ダイビング・エルボーアタック

168センチ、73キロ

堀田といえば、すぐ浮かんでくるのが、長与千種命名の〝元気ジルシの金太郎〟最近は、その元気ジルシの真骨頂になかなかお目にかかれないというのが現状。

ファンからの手紙にも「堀田さんが前半戦のタッグに登場してくる事があるが、堀田さんはブルやアジャなどの重量陣とメインで試合をしてほしい。アジャの裏拳、ブルのラリアートに対抗してデンジャラス・キックを連発してほしい」と堀田への思いがメンメンと綴られていた。

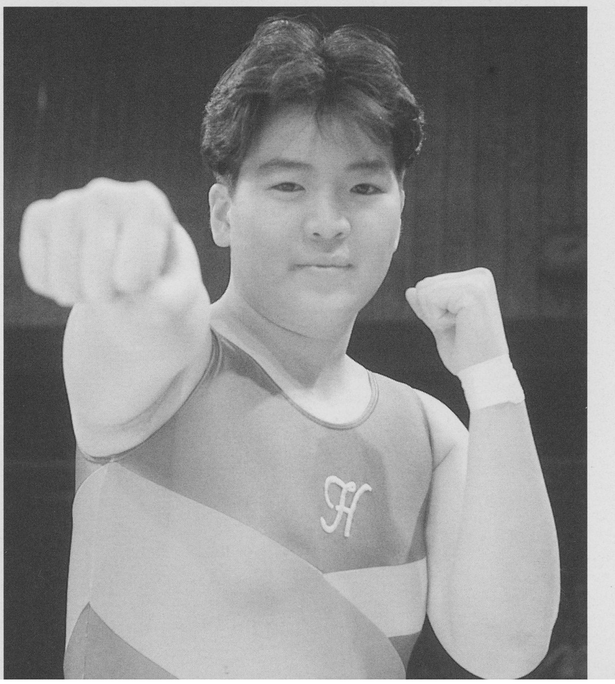
ブルを倒すのは堀田だろうと二重丸をつけられた時期もあったのに、いつのまにか、そんな声も消えてしまった。だが、いまのベビーフェイス陣を見渡した時、キャリアから見て、堀田への期待が出てくるのも当然の事だろう。

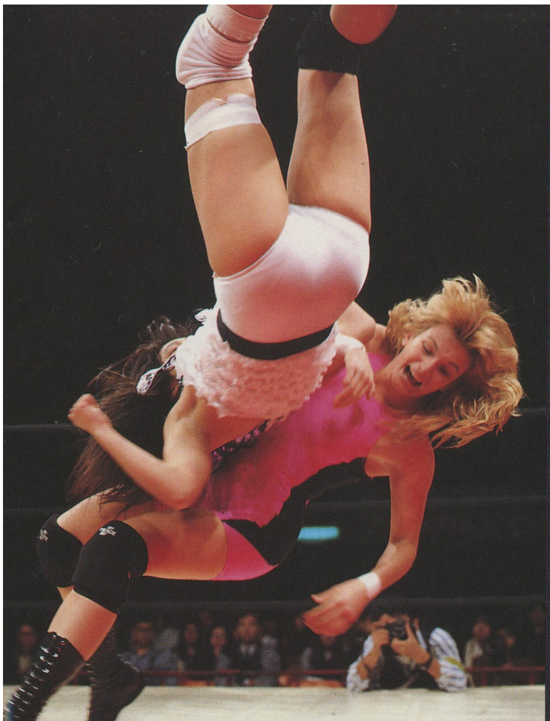
堀田の現状について先輩の長与千種は「テレビでしか見ていないので…」と註釈を付けながら「かつてのように向かって行く気持ちが薄れているような気がする。まだまだ老け込む年でもないし、昔のように向うみずにガンガンと攻めてほしい。守りのレスリングなど出来ないんだから、息の続く限り、休まずに攻め抜いてほしい。あの重量を乗せて繰り出す蹴りの強さは格別。蹴って、蹴って、蹴りまくれば、堀田の新しいパワーが生まれてくる」と励ましている。

松永高司全日本女子プロレス興業会長も「何も考えず無心でリングに上がれ。堀田のパワーはブルやアジャと比べても引けはとらない。堀田に期待している」と語っている。

去年の堀田は尼崎でブル中野と金網マッチというチャンスをつかみながら、いい所なしに敗れてしまった。このショックが尾を引いた面もあるのだろうが、ベビーフェイスのエースとしての存在感を取り戻すためには、スタミナを考えずに攻めまくる事だろう。

「一試合、一試合に全力投球して自分の存在感をアピールしたい。そこからチャンスも生まれてくるだろうし、ファンとのキズナも深めていく」と語るが、堀田の復活が92年ベビーフェイス陣の大きなポイントだ。





DEBBIE MALENKO

デビー・マレンコ

留学2年目はステップ ジャンプ！ フロリダの妖精から世界の妖精へ

PROFILE

1971年３月10日生まれ、フロリダ州オーランド出身。89年秋に有名なマレンコ道場に入門し、90年２月に地元のインディペンデントでデビュー。ランドーレイク市の消防隊に務めながら、フロリダ地区で試合をしていたが昨年３月にプロレス留学生として全日本女子プロレス入り。女子プロ大賞の新人賞を受賞するなど〝大物〟ルーキーとして成長中だ。マレンコ仕込みのサブミッションとスープレックスにマニアを唸らせるが、さわやかで清潔感あふれるルックスにも人気が集まっている。

〈得意技〉ノーザンライト・スープレックス、エース・クラッシャー、ワキ固め、雪崩式フロント・スープレックス、ヒザ十字固め

168センチ、65キロ

マレンコ道場出身のジャジャ馬娘デビーは、プロレス留学2年目の冬を迎えることになった。

デビーにとって、昨年3月に初来日してからの日々は、プロレスラーとして、あらゆるキャリアを積んだ重要な期間だった。

何しろ、マレンコ道場に入門する女の子というのも珍しいのに、まして遠く彼方の日本に単身やって来るなんて、アメリカ人の感覚では考えられない事ばかり。

「プロレスラーという職業に誇りがもてるのは、日本がベスト」という定説が海外マット界にはある。まして、アメリカで女子レスラーは、けして満足出来るポジションにはいない。

その意味でデビーは、ラッキーガールだった。カール・ゴッチと一緒に練習をしている、たった一枚の写真が日本行きのパスポートとなったからだ。

一口に留学生といっても、タイのソンティタム姉妹とは違う。彼女らは、新人と共同生活を行い、純粋な留学生扱いを受けた。…だから、日本語の上達も早く、日本人と同じ待遇で耐えることを学んだ。

その点デビーは、個室に入居し独学で日本語と、日本文化に接したのだ。隣の部屋には陽気なメキシコ人エステルと、正反対の大人しいシンティアのモレノ姉妹が住んだ。

同じ〝外人〟という立場で、デビーはシンティアとすぐ親しくなった。エステルはソンティタム姉妹と同じ課程で鍛えられたため、日本人と同等にみられたからだ。

マレンコ道場で身に付けたスープレックスやサブミッションを思う存分使い、イッキに上昇すると関係者やファンも想像した。だがプロレスは、そんなに甘いものではなかったのだ…。

確かに関節技の掛け方や威力は、さすがにマレンコ道場仕込みだったが、基本となる体力や試合運びはルーキーの域を脱していない。おまけに、コミュニケーションの障害は厚い壁となった。

これは、かつてのメドゥーサも同じ苦境を経験した。しかし、デビーには二十歳という若さが、これらを吹き飛ばす好材料となった。

若さゆえ苦しみ…若さゆえ悩む同世代の日本選手でさえ、この世界で生き抜くのは大きな葛藤がつきまとう。

来日2年目のデビーは、レスラーとして生きる厳しさを体得したため、日本選手以上のアグレッシブな闘いを創り上げるだろう。

そうなると、スープレックスやサブミッションに磨きがかかり、本性を発揮するに違いない。デビー・マレンコが〝トップ外人〟となる日も近い。

未完の大器が開花に向けて走り出す！

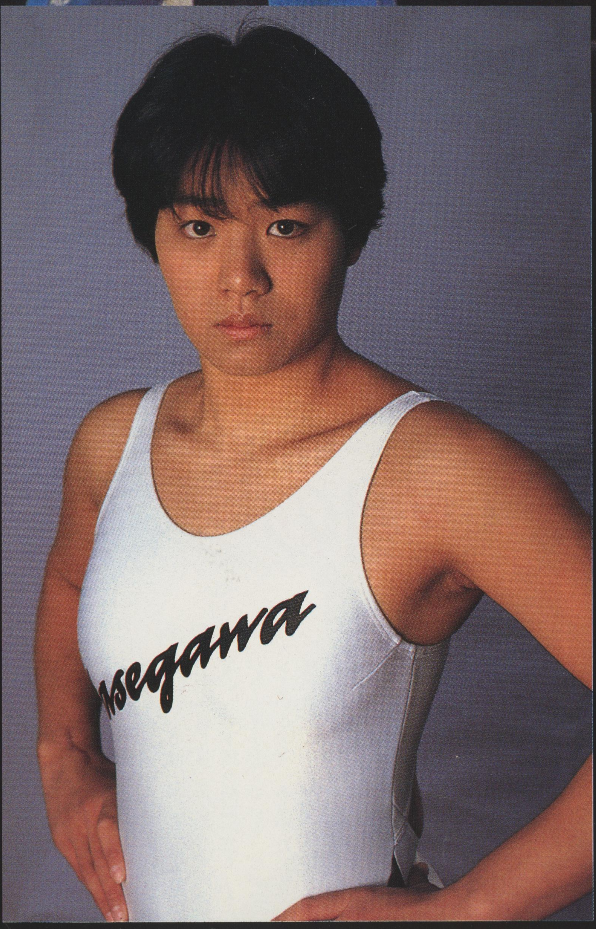
SAKIE HASEGAWA

PROFILE

S45年6月17日生まれ。栃木県上都賀郡出身。高校時代は全空連・空手でインターハイ優勝というキャリアを引っさげ入門。平成元年12月にデビュー後、一時は獄門党に属したが本格派をめざすため離脱。ユニバーサル出場で未完の大器ぶりを花咲かせたが、右手首を骨折し長らく戦線を離れていた。今年は、平成のスター候補生として初心から出直す。

〈得意技〉ローリング・ソバット、ダブルアーム・スープレックス

170センチ、68キロ



長谷川咲恵

未完の大器とか、将来のエース候補と誰もが期待するほど、長谷川咲恵の資質は申し分ない。

１７０センチを越える長身と均整のとれた体格は、それだけで納得させる材料だし、何よりもルックスが人を引きつける。

男性ファンにも女性ファンにも支持される、あどけなさと親近感が大きな魅力なのだ。

さて、本人は周囲の注目をよそに、いたってマイペース。大器晩成タイプといった言葉が、今の長谷川には適切ではないだろうか…。

ユニバーサルに出場したことでその存在が大きくクローズアップされたのは、もう一年前。長い脚線美からのローリング・ソバットやバズーカ砲のようなプランチャスイシーダは、誰もがド胆を抜かした。

恐しく新鮮だったし、その白の水着が初々しさを強調させた。全日本女子プロレスの底辺の広さを再認識するには十分過ぎた。

このまま勢いに乗れば、注目の新星だったのだが…一瞬の油断が奈落の底に落ちる結果となる。捨て身のプランチャ・スイシーダを自爆し、右手首を複雑骨折。復帰するまで、約４ヶ月も休場を余儀なくされたのだ。

長谷川にとって91年は、プロレス生活の中で変化に富んだ一年となった。獄門党を脱退し、ブルにタッグながら胸を借りたのは戦慄そのものだったし、全日本と全日本タッグに各1度ずつ挑戦もした。

オマケに、膝、腰、後頭部、手首をありとあらゆる箇所を負傷。

怪我だらけ、傷だらけの一年が経過したのだ。しかし、どんな一流レスラーでも大成するまでは、幾多の試練や怪我が待ち構えているもの。長谷川は、何年か分の経験を一手に背負い込んだ。

新しい年、長谷川にとってもう未完の大器と言われているだけでなく、トップ・グループに踊り出ることが課せられている。

幸い、他の平成元年組と違い、チャンスも多い。新年早々から、デビー・マレンコとの〝日米新世代軍〟を結成。若さのエネルギーを爆発させる。

お互いにとって、ひょっとしたらベストのパートナーかもしれないし、無限の可能性という点では申し分ない。

この一年、長谷川の成長ぶりをじっくりと見つめていこう。きっと大化けしてくれる―いや、大化けしなければ活性化にはならないのだ。

UKO
TA

三田英津子

大器よめざめよ、黄金の夢鯱!!

PROFILE

S44年5月28日生まれ。東京都世田谷区出身。62年8月デビュー後、山田とドリーム・オルカを結成。恵まれた体格と甘いルックスで人気を集め、ダイナミックな攻撃を信条とする。昨年11月には豊田とのペアで歌手の仲間入りし、一層の飛躍が望まれる。いつ、その大砲が花を開くか!!

〈タイトル歴〉

●全日本タッグ（元年5月～2年6月、11月～3年4月）

〈得意技〉エアプレーン・バスター、ツームストン・ドライバー、アトミック・ドロップ

173センチ、68キロ

三田が同期の豊田真奈美とのコンビで、リングで「TIME TO GO」を唄い出すと、ファンの少女たちが立ち上がり、「エッちゃん」の大合唱。白のブラウスに白のスラックスというコスチュームが、長身の三田にピッタリ。黒のミニのワンピースの豊田とのコントラストも憎いほど決まっている。

〝花の62年組〟として脚光を浴び、今年6年目を迎えた三田だが、〝おっとりした性格〟に〝甘いルックス〟が加わって、6年の歳月を感じさせない初々しさ。

本職のレスリングも磨きがかかってきた。長身を利用したエアプレン・バスターやアトミック・ドロップは三田ならではの迫力と正確さを秘めている。スタミナも随分とついてきた。どんな大きな相手にも向かっていくガッツも、やっと本物になってリングを大いに湧かせている。

女性ファン、それも中高生が圧倒的に多く「エッちゃんてカッコいいでしょう。全部が好き」と憧れの人としての信者は年々ふえており、支持率も高まる一方。

「いつのまにやら6年たってしまった。先輩の数より後輩の数が多くなってきた。下からも、どんどん攻めてくるので、負けないよう先輩を食っていかないと…。もちろん、今年の目標は世界のベルト。挑戦できるように一試合一試合を大切に存在感をアピールしていきたい」

三田も一皮むけてきた。その三田がゴールのないレースに参戦してリングを湧かすようになったら、しめたものだ。

A
ODA

下田美馬

今年はフルモデル・チェンジ!!

PROFILE

S45年12月23日生まれ。東京都目黒区出身。62年8月デビュー。豊田とのスイートハーツで一時は全日本タッグを狙ったが、三田とのコンビが多い。気の強さを売り物とし、男性ファンに人気があるが、スランプを脱出し浮上のチャンスを狙っている今日だ。

〈タイトル歴〉

●全日本ジュニア（元年10月～2月1月）・全日本タッグ（2年11月～3年4月）

〈得意技〉ランニング・ネックブリーカー、ダイビング・ボディアタック

167センチ、63キロ

入門したころ、そのルックスとプロポーションから、レスラーになるより芸能界の方が向いているのではと言われた下田も、6年目を迎えて、体も引きしまり、ルックスにも精カンさがみなぎってレスラーの顔になってきた。

表情からは想像も出来ないほど激しい気性の持ち主で、気の強さがウリの全日本女子プロレスの中でも一、二を争う負けず嫌い。カメラフェースと実物との間に大きな差があり、実際の顔を見た人は、なんでこんなに違うのと、びっくりするほど写真写りが悪く、これでだいぶ損をしている。

体が固いのが悩みのタネだが、軽量（といっても63キロはある）を利用してのランニング・ネックブリーカーやダイビング・ラリアットなど飛びワザが得意。パワーという点では同期の山田敏代や豊田真奈美に劣るが、場外乱闘をものともせずに相手を鉄サクにぶつけるなどラフ・ファイトを仕掛けていく激しさ。これも気の強さが大きな要素になっているのだろう。

「いま一番欲しいのはパワー。パワーアップのための筋力トレーニングを続けていますが、なかなか思ったようにパワーがつきません」。とはいうものの、試合となるとバットの75キロを軽々と持ち上げてボディスラムでリングに叩きつける。

「今年の目標?ベルトも巻きたいが、それより後半戦への定着。62年同期の4人でベルト争いが出来るようになりたい」見かけの派手さとは別に、一歩一歩階段を上がる堅実派らしい。

RI
MIYA

神谷美織

JJ軍団の参謀格

PROFILE

S45年5月19日生まれ、埼玉県所沢市出身。61年9月デビュー。タッグパートナーの天田や高橋が次々と引退していく中、常にマイペースを貫抜く。昨年2月にジャンブル・ジャックに参入し、最近は後輩の伊藤とタッグを組む機会が多い。

〈タイトル歴〉

●全日本タッグ（元年3月～5月）

〈得意技〉ジャンピング・ニーアタック、セントーン、メキシコ式フェイス・バスター

164センチ、65キロ

アジャ、バイソンと同じ61年組、昨年は5人いた同期生も2人が途中でリタイヤ、とうとう3人になってしまった。

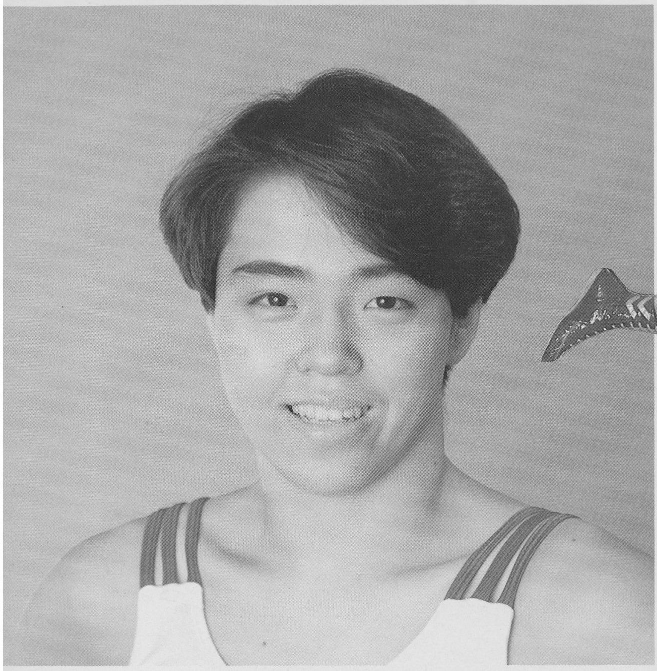
「寂しいというより、いまはアジャやバイソンに負けないように頑張らないという気持ちの方が強く、早く、あの二人に追いつきたい」

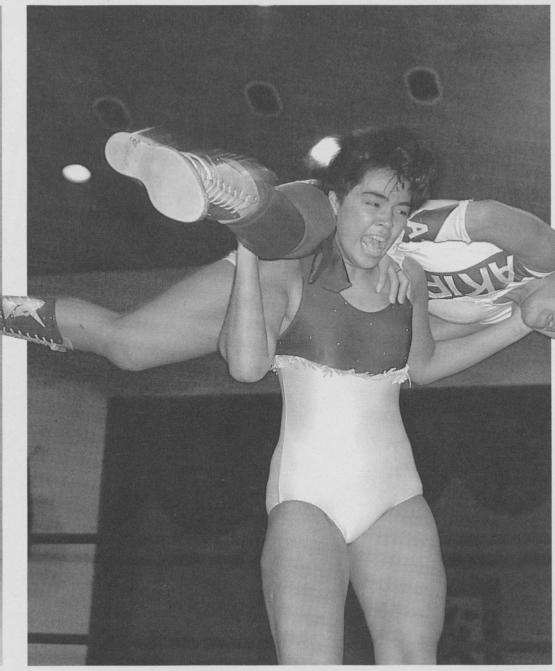
61年組では一番小柄だったのが災いして下積み期間が長く、それが今も尾を引いている。だがファンというのは、ありがたいもの、陽のあたらない神谷にも数多くのファンから、いまもせっせと激励の手紙が続いており、「負けても、負けても、くじける事なくリングに上がる神谷の生きざま」に共鳴する人も多くなってきた。

大変な努力家なのに、残念な事には、そのわりに成果が上がらないこと。タッグのペアが次々に引退していくという不運もあった。

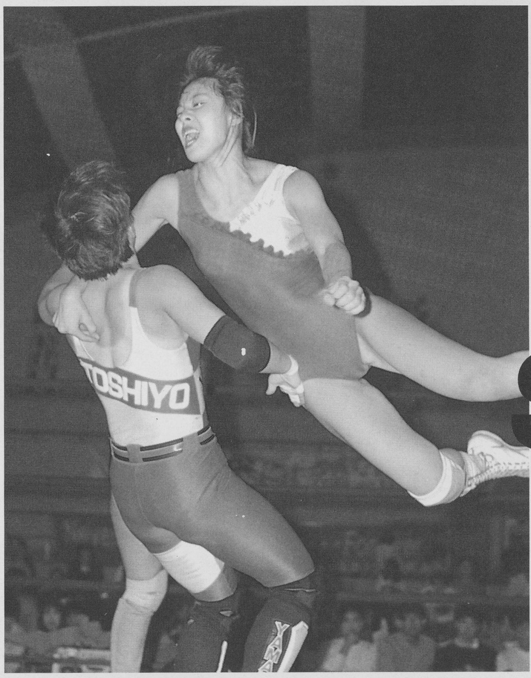
「一番残念だったのは全日本タッグを取った時のパートナー、天田麗文が突然引退して、ベルトを返上しなければならなくなったこと。それ以来、タイトルにもパートナーにも恵まれなかった。でも、リングでの試合は、もともと自分のすべてをさらけだした孤独な闘い。負けた方が弱いんです」

神谷にも意地と夢がある。それは「同期のアジャやバイソンと闘えるようになること」だ。同期でも、二人に人気、実力面で差をつけられた神谷が、鍛え直して、どんな試合を繰り広げられるか、その道は遠く険しいが、ぜひとも実現させてやりたいものだ。

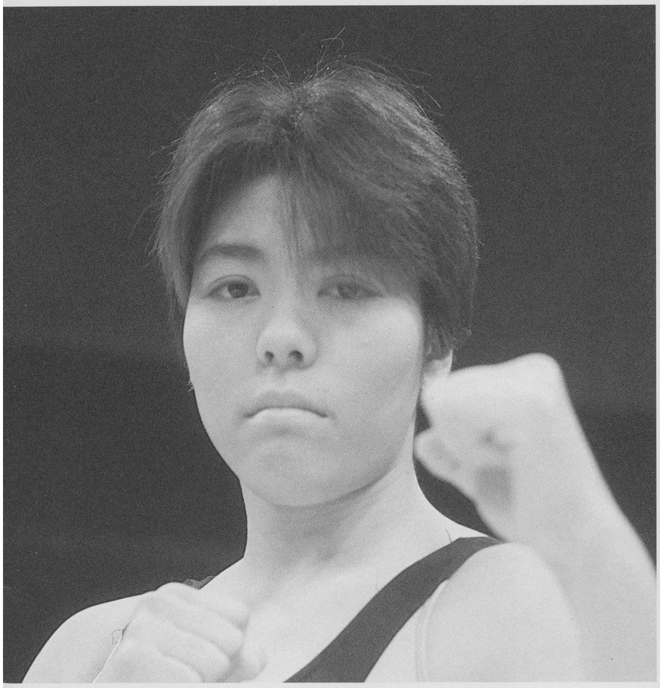


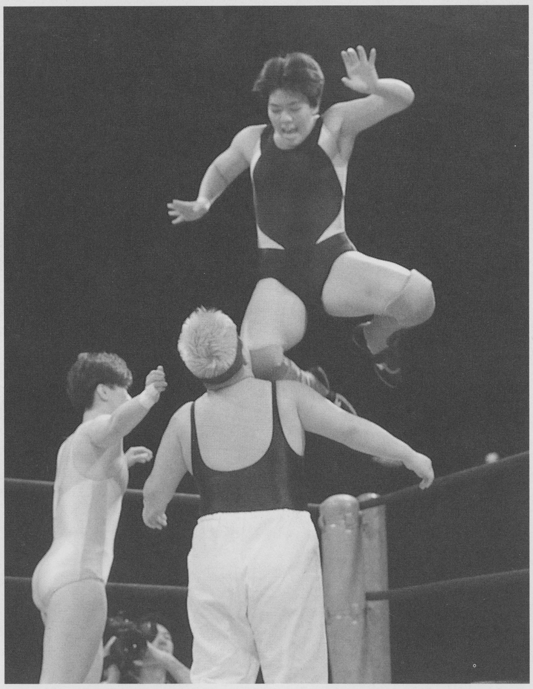


ETS
MI



MIM
SHIM

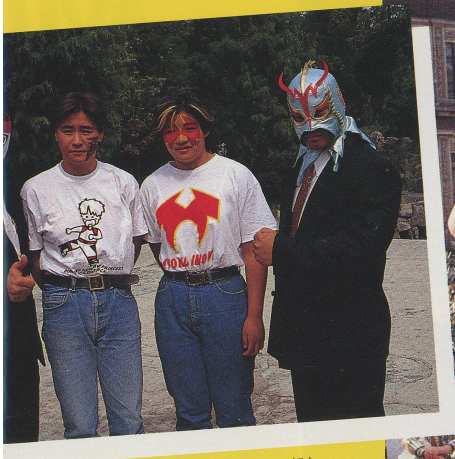




MIO
KA

提携!! KOが大暴れし、話題を独占!!

アステカの民族衣裳を着た女性と、ソカロ広場で撮影。「ホントは、この衣裳で凱旋したかった」（山田&井上）。



日本からやって来た4人衆──。左から、超人気者のオクタゴン、山田、井上、ウルティモドラゴン。

メキシコ国旗を持つ井上と山田。まさに、心はメヒコ、いや心はルチャなのだ。

本場でも、前方回転式ロメロ・スペシャルをひんぱんに使っていた井上。

松永俊国専務とパコ・アロンソ代表が、がっちり握手。

メキシコのEMLL（エンプレッサ・メヒカーノ・デ・ルチャ・リブレ）との提携により、常時日本選手を送り込むことになった全日本女子プロレス。

昨年10月には第一弾として、山田敏代&井上京子の2選手が約一ヶ月（10月14日〜11月20日）の遠征を行い、大活躍したばかりだ。

この遠征には、松永俊国専務と小川企画広報部長も同行。EMLLのパコ・アロンソ代表と会談を持ち、友交ムードで進まれていったのだ。

山田&井上は、10月18日のアレナ・メヒコ大会からスタートし、ピスタ・レボルシオンやアレナ・コリセオの主要会場を中心に、チコンクアック、カプルアック、トラックカラ、クエルナバカのメキシコ郊外、アカプルコ等の地方都市もサーキット。

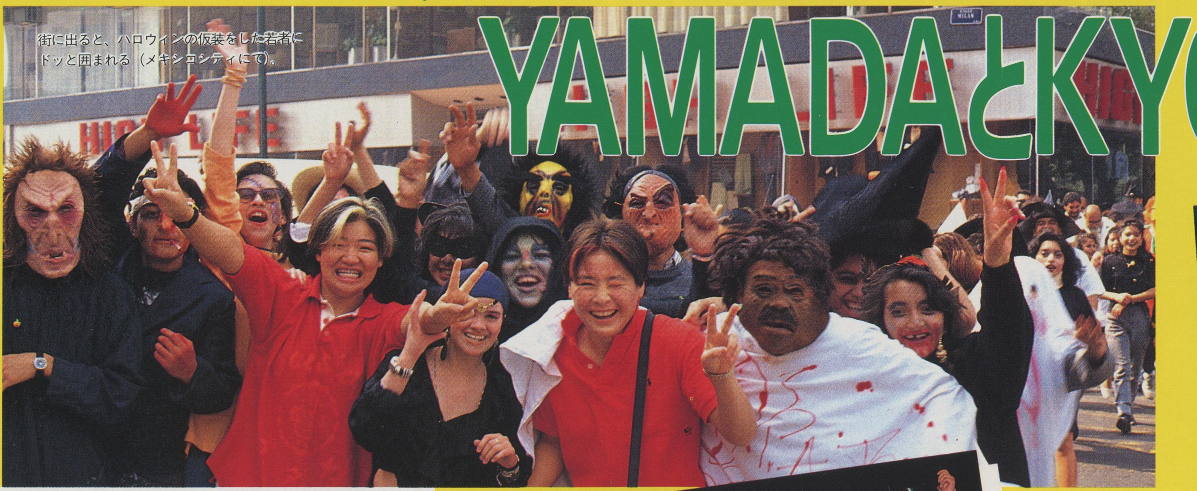
ルーダ（ヒール）として、試合を行った山田&井上。その対戦相手は主に、エステルとシンティアのモレノ姉妹が抜テキされ、連日熱闘を展開。

各地のプロモーターや観客にもそのファイトは絶賛され、〝ハポン旋風〟を巻き起こしたのだった。

「試合のレベルはやっぱり日本が一番だと思うけど、海外遠征は精神修業の場じゃないですかね？メキシコで、楽しい事も辛い事もたくさんあったけど、今となっては全部いい思い出です。今後、遠征する選手の足場を作ったつもりだから、目的意識を持って頑張ってほしい…」と、メキシコ遠征の先輩である山田&井上の共通したコメントだ。

全日本女子プロレスでは、今春にも第2弾をEMLLにブッキングする予定。メキシコのルチャ・リブレを学び、華麗なる空中戦がその土産となるよう、各選手に遠征の成果を期待したい。

メキシコEMLLと YAMADAとKYO



街に出ると、ハロウィンの仮装をした若者にドッと囲まれる（メキシコシティにて）。

約一ヶ月間に渡るサーキットでは、ほぼ全勝を記録。

（ルーツ）先代のサルバドレ・ルタロスが1933年にエンプレッサ・メヒカーノ・デ・ルチャ・リブレ（ＥＭＬＬ）を設立。プロレスを「ルチャ・リブレ」（自由な闘い）と名付け、メキシコ庶民に浸透させていった。スペインやアメリカなどの侵略に対し、闘い続け、迫害され続けてきたメキシコの歴史をそのまま取り入れ、リンピオとルードによる自由を求める闘いを繰り広げてきた。またレスラーをルチャドール＝戦士と称すのはマヤ、アステカの文明の影響を強く受け、古代文明に端を発する様々な闘いを原点とするからである。

（歴史）ルタロスは、レスラーの数が増えてくるとメキシコのナンバーＩ、すなわちナショナル王者を新設。さらに国内王者が続々と誕生した次は、世界王者の挑戦—と飛躍していった。ＥＭＬＬは常設会場として、アレナメヒコとアレナ・コリセオを二本柱とし、エル・サントやゴリー・ゲレロ、ブラック・シャドー、そしてミル・マスカラス、ソリタリオ、レイ・メンドーサ…スターを次々と世に送り出した。個人所有の会場を持ち、独占興行を行ってきたＥＭＬＬに対し、フランシスコ・フローレスが75年に独立組織プロモシオネス・モラを作り、ＵＷＡ（ユニバーサル・レスリング・アソシエーション）を発足。ＥＭＬＬから、ごっそりレスラーを引き抜き大組織に成長していった。ＵＷＡは新日本プロレスと提携し、アンドレやホーガンといった外人スターを招き、国際的に活性化させていった。フローレス死後は、カルロス・マイネスが受け継いだが、今度はＥＭＬＬが89年より民放大手ＴＶ局「テレビサ」によるメキシコシティの放送を開業してから、再び一大ルチャ・ブームを築き、ＵＷＡを大きく引き離して現在に至る。

（興行）ＥＭＬＬ、ＵＷＡ共に毎週、同じ曜日に、同じ会場で定期戦を開催。ＥＭＬＬはアレナ・メヒコ、ＵＷＡはエル・トレオを総本山とし、日曜日などはメキシコシティだけで10数ヶ所の興行が繰り広げられる。おそらく興行数世界一のプロレス王国と言っても過言ではない。入場料は、5000ペソ（約250円）から20000ペソ（約1000円）まで—。

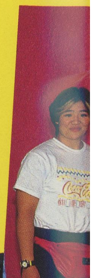
（試合）どの興行も一日４～５試合行われ、第一試合から時間無制限３本勝負。６人タッグやタッグマッチが主流で、マノ・ア・マノ（シングル）は前座試合か、カンペオナート（選手権試合）、髪切りマッチ、覆面はぎマッチに限定される。６人タッグの場合は、キャプテンをフォールしなければＩ本とならない。タッグマッチは、相手の双方を押えなければならない。また、カンペオナートは殴る蹴るのラフプレーは禁止という厳格なルールで行われる。

（コミッション）ボクシングとルチャ・リブレの共通したコミッショナーが存在し、パラシオ・デ・ロス・デポルテス（スポーツ協会）でライセンスを取らなければ試合は出来ない。

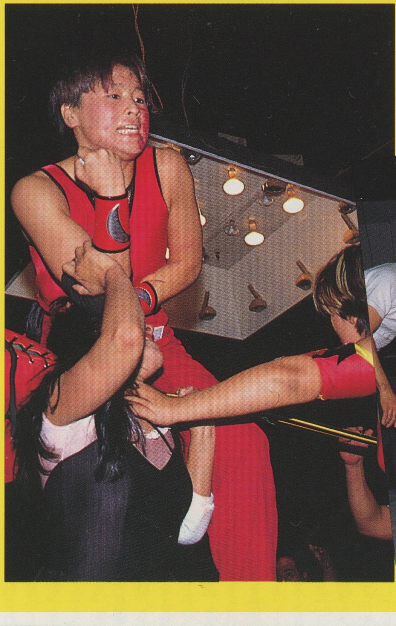
（組合）通称シンディカードと呼ばれ、正式名称は「シンディカート・ナショナル・デ・ルチャドーレス・イ・レフェレス・プロフェショナレス・デ・ルチャ・リブレ」（マニーグスマン代表）。プロモーターは興行収入の３パーセントをシンディカートに支払うシステムになっており、レスラーの事故や怪我の見舞金や活動資金として運用されている。レスラーはシンディカートに入る事が義務付けられている。

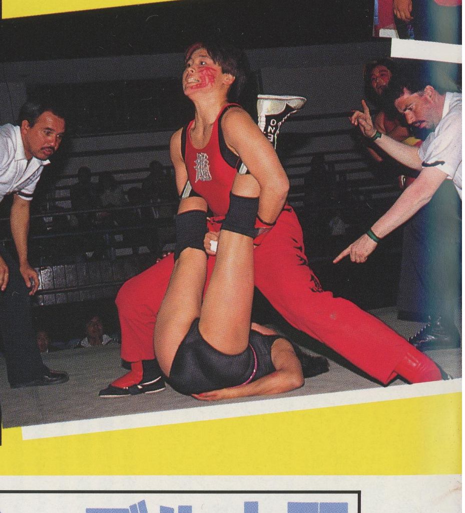
（ＴＶ）ＥＭＬＬが89年暮より、それまで教育上の問題から禁止されていたルチャ・リブレ中継をメキシコシティで開始。民放最大手ＴＶ局「テレビサ」が毎週土曜日（午後６時から２時間）と日曜日（午後12時から２時間）に放送。オクタゴンやミステリオソなど独自のキャラクターがファンに支持され、かつてないブームを築いた。ＵＷＡもテレビサに対抗し、イメビジョンで放送開始。

（女子プロレス事情）現在、ＵＷＡは女子の試合を組み入れていないため、ＥＭＬＬに選手が集結。エステルとシンティアのモレノ姉妹、ローラ・ゴンザレス、スレイマ、レディアパッチ、ラ・ディアボリカ、ネフタリ、マルタ・ビジャロボスなど20名を越えるルチャドーラが活躍中。パコ・アロンソ代表の要望により女子を活性化するため、昨年より全日本女子プロレスと提携した。今年中には、ＥＭＬＬのタイトル運営組織であるＣＭＬＬ（コンセホ・ムンディアル・デ・ルチャ・リブレ）認定の世界女子王座の争奪戦が行われる。



ルーダ（ヒール）にもトライした山田。いやというほどブーイングを浴びたのだった。





タッグマッチでは常時、二人のレフェリーが試合を裁く。

がんばれ〝最古参〟ブル中野
週プロと同じ昭和58年デビュー
今年で〝10年目〟に突入！

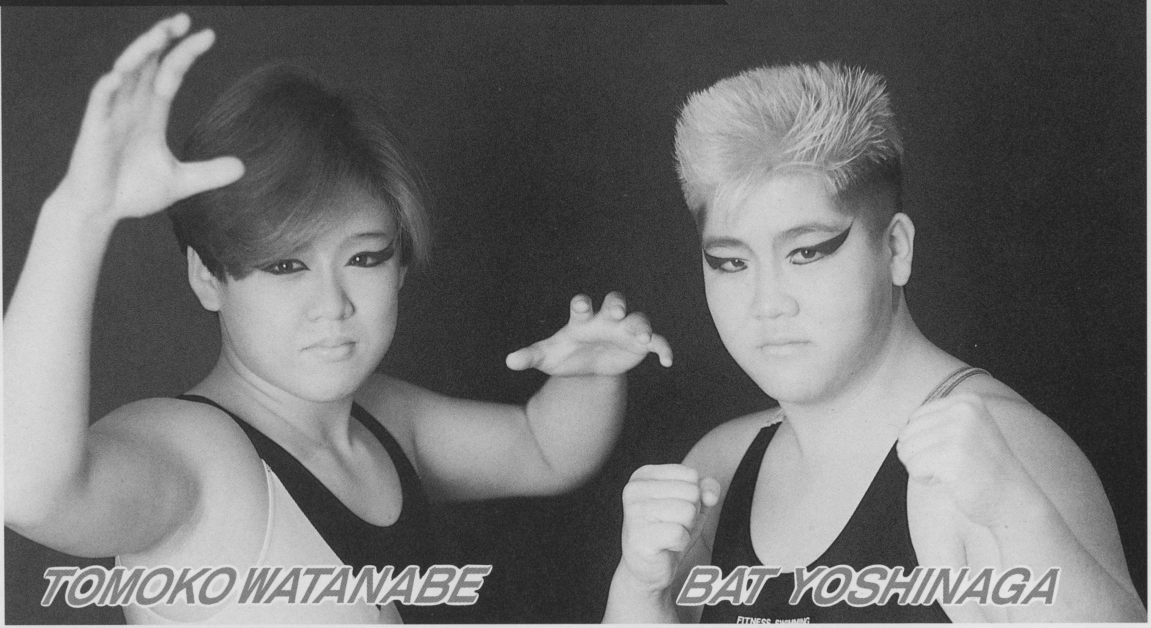
週刊プロレス

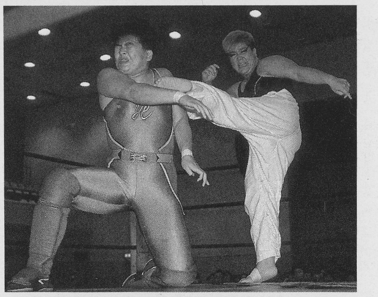
全国書店＆コンビニエンス＆Kioskで発売!!

㈱ベースボール・マガジン社　毎週木曜日発売　定価340円
〒101 東京都千代田区三崎町 3-10-10　販売☎03(3238)0181　振替口座★東京8-46620番
編集☎03(3238)0195　テレホンサービス☎03(3238)0467　FAX通信☎03(3238)0160

時代は平成

だから平成元年組に視線集注！





◆WWWA世界格闘技チャンピオン

バット吉永

世界最強をめざす格闘マシーン

162センチ、75キロ

「格闘技戦で見せる、あの強烈な蹴りが、ふだんの試合でも次から次へと繰り出されるようになり、そのうえジャーマンやドロップキックも飛び出すなど、バットの試合は勝っても負けても小気味よい。昨年6月タイに遠征してムエタイの道場で学んだことが大きな転機になったような気がする」(志生野フジＴＶ中継アナウンサー)

全日本女子プロレスの名物となった格闘技戦では無敗を誇り、初代ＷＷＷＡ世界格闘技チャンピオンの座にあるバットにとって、一番の武器は極真・中村誠門下で鍛えた一撃で野球用バットを折る蹴りと突き。ブル中野率いる獄門党でも欠かす事の出来ない重要な存在となっている。

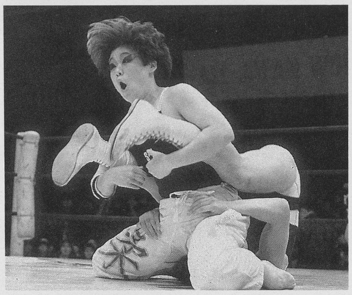
昨年は敗れたとはいえ、オールパシフィックに挑戦するなど格闘技だけでなく、本職のレスリングでの充実ぶりが目立った。志生野アナウンサーは吉永の事を〝小型戦車〟と呼ぶが、確かに１６２㌢の身長に75㌔という重量で、リングを一杯に使って突進するバットの姿は小型戦車そのものだ。

リングでの暴れぶりに比べ、素顔のバットは明るく、ヒョウヒョウとした感じ。特に同期の渡辺と、早口でしゃべっている姿など、高校生のノリそのもの。

「今年？　そうですね。ベルトも取りたいが、もっと、もっとスピードとパワーをつけ、お客さんから、さすがバットといわれるような試合をしたい。格闘技戦も指名されれば、相手が誰であろうと戦っていく」

4年目に入って、さらに飛躍を目ざすバット。いったい今年はどんなレスリングを見せてくれるのだろう。一皮むけそうなバットへの期待は大きい。

本名　吉永恵理子。昭和45年7月15日生まれ。兵庫県尼崎市生まれ。平成元年9月デビュー。得意技　顔面蹴り、カーフブランディング、ジャーマン・スープレックス。



渡辺智子

柔道＆幻惑殺法に注目!!

162センチ、70キロ

同期の伊藤と同じ柔道初段だけに、どうしても比較されがち。昨年は右腕肉離れが災いして、あまりパッとした活躍ができなかったが、新しい年を迎えて「新規出直し」をはかっている。

「去年は入門以来、最悪の年。右腕に続いて歯が化膿、手術するなど、自分でも嫌になるほど次から次へ故障が続きました。でも、その分を今年は取り返します。歯ぐらいと思われるかもしれませんが、ワザを掛ける時、また掛けられた時、歯を食いしばることが出来ないというのは力が入らないです」

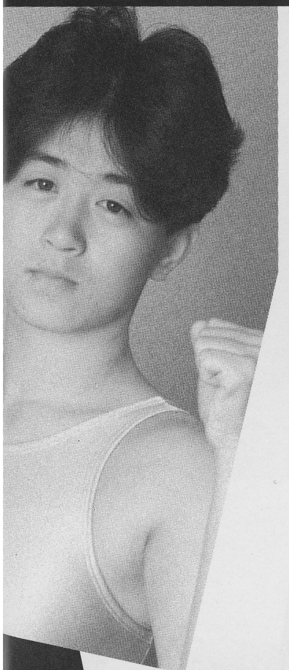
同期のバットと共にブル中野の獄門党に入り、交替でメインにも登場しているが、ブルや井上京子と比べると、どうしても見劣りがする。ドンのブル中野は「まだまだこれからの選手です。小さく固まらず、長所をのばすようにしてくれれば…。技術的に迷っている面があるが、精神的に強いものがあるので、自分で自分の道を切り拓いていってくれると思う」と期待をかけている。

渡辺といえば、すぐ出てくるのがヒョウキンさと独得のおしゃべり。黙っているのは物を食べている時ぐらいというが、食べる方もすさまじい。とにかくお菓子類が大好きで、渡辺のバックの中にはいろんなお菓子が一杯詰まっている。新しいお菓子が出ると、すぐ買って食べてみるという〝お菓子博士〟だ。

「今年の目標はバットとのコンビで全日本タッグのベルトを巻くこと。もちろん全日本のシングルにも挑戦したい」顔をくしゃくしゃにしながら語る渡辺。渡辺が語ると、どうしても真剣味が薄くなるのだが、ベルトに対する執念だけは別らしく、きっぱりと言いきった。今年、飛躍を期待される選手の一人だ。愛称トモ。

昭和46年2月23日生まれ。千葉市出身。平成元年12月デビュー。

得意技　一本背負い。



伊藤董

ヤック

隊

163センチ、66キロ

最近、ＪＪ（ジャングル・ジャック）のアジャ・コング、バイソン木村と組んで6人タッグ戦に登場する機会が多く、ファンからも「伊藤選手はＪＪに入ったのですか」という問い合わせが多い。

「ＪＪに入ったわけではありませんが、アジャさん、バイソンさんと組んで試合をすることで学ぶ事も多く、いまは毎日が勉強です」

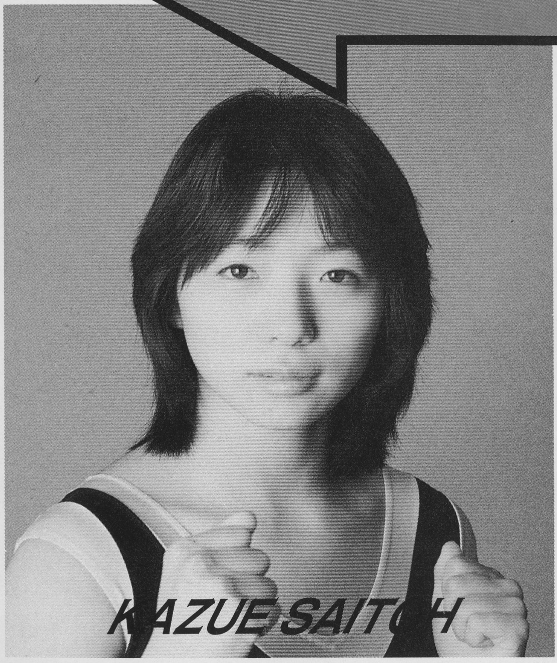
どちらかといえば体は小さい方だが、スタミナは抜群。ランニング、それも長距離が得意で、全日

が二重丸。

一時期スランプにあえいでいたようだが、ＪＪとのトリオでセミファイナルやメインエベンターに登場するようになってから、それもふっきれたのか、動きの速いレスリングを展開して、お客さんを湧かせている。

「アジャさんや、バイソンさんのようなパワーのレスリングは無理ですが、自分なりのレスリングを貫いていきたい。そのためにはスピードと豊富なワザ。それしかあ

この中から何人
スターに化けるか!?



斉藤和枝

162センチ、65キロ

前進また前進のビッグエッグ!!

ソフトで、おとなしい性格が、個性の強いレスラーの中では、どうしても目立たず損をしているが、練習は熱心だし、シンは強い。

高校時代からアマレスを習い、上位入賞したこともあるなど格闘技が大好き。

「正直いって、なん度もプロレスをやめようと思ったことがあります。でも、ここでやめたら負け犬になってしまう。とにかく頑張るんだと自分に言い聞かせてきました」というが、その努力が最近の試合にあらわれ、ねばり強い試合を展開、ファンからも注目を浴びるようになってきた。

新人時代は地方サーキットになると居残り組の常連。それが今では、たとえ前座とはいえ、毎日、試合に出場できる喜びでいっぱいだ。

「こんなことを言うと、皆に笑われるかもしれませんが、プロレスの面白さと難しさが、なんとなく分りかけてきたという所です。毎日の試合が楽しくって…」

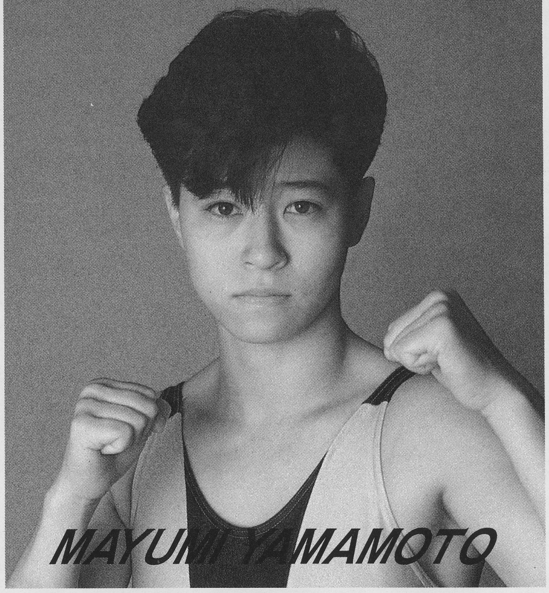
最近は欠点といわれたスタミナもついてきたが、そうなると豊富なワザも要求されてくる。これがプロとしての難しさだし、若手がぶつかる第一の壁。

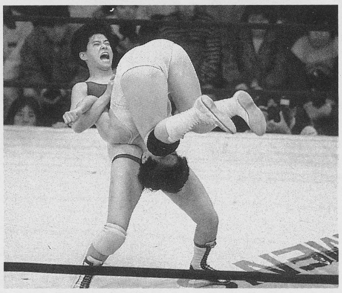
デイリースポーツ運動部の安部正之氏も「下積みをコツコツと続ける斉藤の努力には感心するが、努力すれば必ず報われると決まっていないのがプロの世界。斉藤が今年、飛躍するためには一皮も二皮もむけないことには…。それが何であるかは自分がリングの中でつかむことだ」と厳しい注文をつけている。

「今年の目標？いっぱいありますが、ジャパン・グランプリに出場できるようになることと、タッグ・リーグのメンバーに選ばれること」と言いきっている。斉藤の〝今年〟に期待しよう。

昭和45年8月23日生まれ。横浜市出身。平成元年12月デビュー。

得意技　ドロップ・キック。





山元真由美

165センチ、63キロ

格闘キャリアを生かす勝負の年

リングに上がると〝マーちゃん〟という〝黄色い声〟と共にテープが乱れ飛び、山元が勝つと歓声がこだまし、負けると大きなタメ息が会場にどよめく。少女ファンたちにとっては、まさにアイドル的存在だ。

「マーちゃん？カッコいいじゃん。いまは負ける方が多いけど、マーちゃんがメインエベンターになるまで応援していく」という高校生ファン。

165㌢という身長に対して体重は63㌔。どちらかといえば女子レスラーというより、モデルなみのスリムなプロポーション。

「体重をふやそうと食事なんかにも気をつけているんですが、なかなか太らないんです。もっと体重をふやす方法はないですかネ」やせるために苦しいダイエットに励む女性達からみると、なんともうらやましい体質だが、レスラーにとっては一番のウィークポイント。

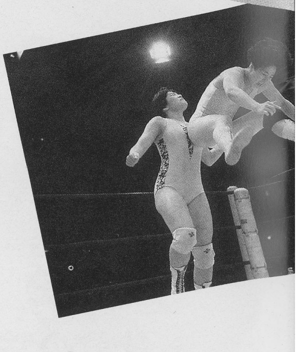
山元の敗戦のほとんどが軽量とそれからくるパワー不足。どちらかといえばテクニシャン派だが、山元らしい決めワザが確立していないのも欠点。高校時代からプロレス入りするため習い覚えた和道流空手やシュートボクシングのワザが実際の試合で、あまり生かされていないのは惜しい。

「あれもやりたい、これもやりたいと思うのですが、タイミングの問題もあって、なかなかうまくいきません」というが、これも相手のペースで試合が始まるという消極さが原因ではないだろうか。

松永太コーチも「何も考えず、もっとガンガン試合をするようになれば、一皮も二皮もむけてくるんだが…。同じような体の北斗晶や豊田真奈美の積極性と個性的なワザを見習ってほしい」といっている。4年目に入った今年が山元の正念場だろう。愛称マーちゃん。

昭和44年7月23日生まれ。広島県大竹市出身。平成元年12月デビュー。

得意技　ネックブリーカー。



ジャングル・ジの突撃部

本女子プロレス恒例の1月3日の正月マラソンでは優勝の常連だ。「走るのは好きです」という言葉どおり、ヒマさえあれば走っている。それが下半身の鍛練になると同時にワザのキレにもつながっているようだ。

高校時代から柔道を学んでいただけに投げワザが得意。入門最初のプロテストでは同期生9人全員を連続して投げワザで仕止めたワザの切れとスタミナに審査員全員

りません」

地方サーキット中でも早朝ランニングを黙々と続けている努力家。

「今年の目標？まず全日本のベルトを狙います。挑戦のチャンスが与えられるよう毎日の試合を大切にしたい」と語る伊藤。京女のシンの強さが今年は花を開きそうな予感がする。愛称がチャピン。

昭和46年10月20日生まれ。京都市出身。平成元年10月デビュー。

得意技　ヒップアタック。

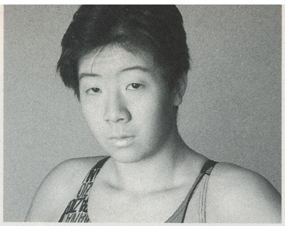
未来を背負う フレッシュ・パワー！

前座最前線

只今、注目の時….

沼田三絵美

SAEMI NUMATA



161センチ、64キロ

一見おとなしそうな顔をしているが、気性の激しさは同期の中でも格別。去年は内臓の手術やカゼによる後遺症などで試合出場回数が少なかったが、その分を今年に賭けている。

引退した長与千種にあこがれ、そのため中学時代から極真空手の道場に通っていたそうだが、実際の試合に空手技が出てこないのは残念。昨年10月の富山大会でも極真空手の先輩、バット吉永とのシングル戦でも一方的にバットの蹴りに押しまくられ、反撃のチャンスもつかめないままのワンサイド・マッチ。

いま沼田に求められているのはガムシャラの攻め。とくに先輩との試合となると攻めより守りが優先してしまう。これも、いい試合をしたいという気持ちが、攻めより守りになってしまうのかもしれない。気の強さが試合に直結していないのが現状でガッツむき出しの試合が強く望まれている。

沼田といえば思い出すのが、練習生になるため、高校も目黒の道場に近い日の出女子高を選び、毎日、学校が終ると道場に直行、その後、空手の道場へ通うという熱心さ。

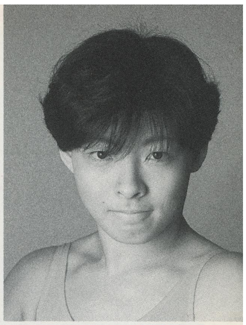
「とにかく試合のある日は必ず出れるように頑張りたい。今年の目標の一つは、空位になっているジュニアのベルトを獲得することです」というのが92年の抱負だそうだ。愛称ヌマッチン。

昭和48年3月23日生まれ。東京都世田谷区出身。平成2年9月デビュー。得意技 ドロップ・キック。

ウェイトアップを克服せよ！

中見川志保

SHIHO NAKAMIGAWA



160センチ、60キロ

大型化している全日本女子プロレスの中では、160センチ、60キロという体は大きなハンディー。高校入学早々、アマレスを学ぶかたわら練習生として目黒の道場に通い、オーディション合格と同時に高校には、さっさと退学届を提出、先生から「そんなに小さな体で大丈夫なの…」と心配されてのプロレス入り。

小さな体をおぎなうのがガッツ。体重では倍近くある鳥巣朱美を相手の格闘技戦でも真向から勝負を挑み、手数では勝っても、パンチ力の差で微差判定負けとはなったものの、その闘いぶりは観客から大きく評価された。

90年度の新人王だが、ここのところ先輩相手の試合が多く、そのためか戦績は、あまり良くないが、負けた時の口惜しそうな表情などガッツは健在。

「いまは試合に出れるだけでも幸せ。去年などは体重が60キロを切る事が多く、そのため地方サーキットに行けないケースもありましたから…。でも、満足の行く試合が出来ないのがもどかしい。パワーアップとスピードアップが自分の課題です」

軽量を利用したフライング技に活路を見い出そうとしており、そのためにも「ルチャのテクニックをなんとか自分の物にしたい」そして「メキシコへ試合で行けるようになりたい」というのが今年に賭ける夢。そのためにも練習あるのみと言うのが、いまの心境だ。愛称ナカミ。

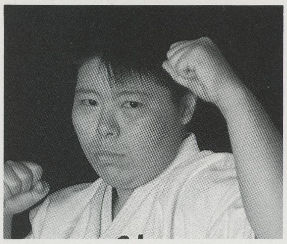
昭和48年7月22日生まれ。東京都墨田区出身。平成2年10月デビュー。得意技 ドロップ・キック。

鳥巣朱美

165センチ、100キロ

流血の女子格闘家.!?

AKEMI TORISU



130キロあった体もトレーニングで100キロに落ちたが、それでも重量からいうとブル中野、アジャ・コングに次ぐ3番目。

一昨年七月、全空連2段という実績をもとに、一般公募でバット吉永との格闘技戦に挑戦したが、1回でKOされ、それを機会に女子レスラーに転身したという変り種だ。

巨体が邪魔をするのか、受身などが悪く、やっと去年のプロテストに合格した遅咲き。重量があるため、うまく上に乗れれば圧殺フォールということになるが、そこに持ち込むまでのプロセスとなると、まだまだ勉強することが多い。

小さいころから柔道、剣道、アマレス、それに空手を学び、日本空手協会初段、全日本空手道連盟二段という肩書きを持っているが、これらの修練が実際の試合では、ほとんど生かされていない。

松永健司全日本女子プロレス社長は「あの大きな体が有効に使えていない。小さな相手なら体だけで勝てるかもしれないが、先輩連中との試合となると、そうはいかない。もっとスピードアップし、積極的に攻めないと…。一言で言えば練習が足りない。スタミナだって不十分」と忠告している。

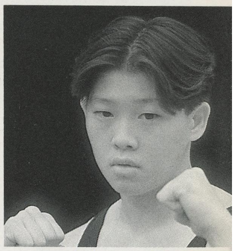
これも鳥巣を将来の大器として期待しているための苦言。本人も「もっと、もっと練習を積んで、みんなに認められる選手になりたい」というが、今年が一つのターニングポイントになりそうだ。

昭和45年10月10日生まれ。佐賀市出身。

腕力は女子プロ一を自認.!?

李由紀

LEE YUKI



160センチ、65キロ

慢性の盲腸炎を手術で直したっと思ったら、今度は右ヒザ半月板を痛めて11月に手術と、昨年は故障の連続で、本人にとっては、なんとも不本意な1年だった。

体が小さいわりに大ワザを使うのが特徴で、あの大きな鳥巣を持ち上げボディスラムで攻めようとして、よろけてジン帯を痛めるなど、どんな相手にも逃げずに向かっていくのが李の〝売り〟。

腕相撲の強さを売り物にしているだけに腕の太さは格別。フジテレビで女子プロレスの解説をしているデイリースポーツ運動部、安部正之氏は「平成2年組の3人の中では体が一番小さいが、変にテクニッシャンを目ざさず自分のレスリングを確立しようとしているのは認める。が、故障の多いのが難点。それも下半身が出来ていないからではないか。ワザを覚えるのもいいが、もっとトレーニングを積んで下半身を鍛えて、個性のある選手になってほしい」と注告している。

本人も、この事はよく分かっているようで「去年は故障の連続だったが、今年は、とにかく故障のないようにしたい。故障で休むというのは、もう、こりごりです。とにかく全試合出場というのが今年のメインテーマです」という。

いま、ココナッツ・クラッシュなど新しいワザの習得に励んでいるようだが〝新生・李〟に今年を期待しよう。愛称リー。

昭和48年6月17日生まれ。鎌倉市出身。平成2年8月デビュー。得意技 フライング・キック。

玉田りえ

160センチ、60キロ

RIE TAMADA

平成3年組の中では一番体は小さいが、それを補なってあまりあるのがガッツ。学校を卒業してからアルバイトをしながら練習生として、毎日、茨城県結城郡八千代町の実家から3時間かけて目黒の道場に通っていたという熱心さ。

「いつも家に着くのは午後8時か9時。でも一度も苦しいと思った事はなかった。プロレスラーになるのが夢でしたから。プロレスを意識したのは長与千種さんの試合を見てからです。チコさんてカッコよかった」

とにかく体は小さいがスピードがあり、レスリング・センスも十分。練習も好きだし、どんな苦しい時でも笑顔をたやさない明るさがトレードマーク。

「練習で十分に使えるワザも試合になると、なかなかタイミングがつかめず、うまくいかない。練習と試合は随分違うという事を痛感しています。もっと、もっと練習を積んでいかないと…。毎日毎日が反省でいっぱいです」

目標の選手は山田敏代というが本人とはタイプは随分違う。「山田さんのようなパワーあふれる試合がしたいんです。体も違いますが山田先輩を目標に頑張ります」

歌が大好きで、カラオケのマイクを握ると、なかなか離さない。それも演歌からポップスまでとレパートリも幅広い。厳しい練習のあとは歌でストレスを解消している。持ち前のガッツでリングでの活躍を期待しよう。愛称リエ。

昭和48年3月10日生まれ。茨城県八千代町出身。趣味は音楽鑑賞。

長谷川智香子

164センチ、62キロ

CHIKAKO HASEGAWA

お嬢さんタイプだが、気の強さは人一倍。同じようなタイプの下田美馬と比べられることが多いが、気の強さでは甲乙つけがたい。

同期生のほとんどが、個人選手に憧れての女子プロレス入りだったのに対し「自分には、これしか見えなかった。世の中で一番素敵なものと思った」というホット派。そのため高校を卒業してからと猛反対する両親を一ヵ月かけて説得、高校2年で中退してのプロレス入り。

プロレス入りに備えて、高校の部活で空手を学び、バスケットボールで活躍したが、体が柔らかく、新人最大の難関といわれる股割りも軽々とこなして「タコのような体」と関係者をびっくりさせた。カンもよく、新しいワザなどの覚えも早い。

劣勢を持ち前の体の柔らかさを利用して、体を入れ替えフォールに持ち込むというケースが多いが、大成するためには積極的なファイト。目標にする北斗晶の自爆を恐れず次から次へと繰り出すアタック殺法を身につけることが必要だろう。

高校時代から英語が好きで、デビー・マレンコにも自から話かけて英会話の勉強をするなどベストフレンドになっている。

「今年の目標？ 全試合に出場できるようになりたい。それと北斗さんのように得意ワザをたくさん身につけたい。いまは覚える事が多くて大変です」愛称チカ。

昭和48年6月25日生まれ。東京都目黒区出身。アルバム作りが趣味。

大木紀子

171センチ、76キロ

NORIKO OHKI

高校時代のスポーツ歴はすばらしい。全空連空手の初段で、全国高校選抜大会でベスト8、インターハイでは主将として団体優勝。そのうえ栃木県高校陸上大会砲丸投げ2位。空手に専念していたため投げワザには難があるが、がっぷり組めば、100キロを超える鳥巣朱美もタジタジ。

長谷川咲恵の高校の後輩。そんな所から目標の選手として先輩の長谷川咲恵を上げている。

「別に高校の先輩だからというわけではありません。高校時代から空手で長谷川先輩を目標に励んできたので、プロレスでも先輩のように頑張りたい」

171センチ、76キロと体には恵まれており、大きな体の人にはありがちの〝おっとり型〟だが、気の強さは別。プロテストは3回目で合格したが、2回目のテストに落ちた時は休みを返上して特訓の毎日。その労が報われた第3回のテストで合格した時は大きな涙がホオを伝っていた。

ヒザを痛めて、一時休養していたが、それも全快、元気に練習に試合にと張りきっている。大木への注文はせっかくの空手ワザが試合に生かされていないこと。長谷川咲恵と同じように長い足を生かした空手の蹴りがスムーズに出るようになれば、試合の内容も大きく変ってくるだろう。「後輩も入ってくるので、負けないように頑張りたい。一日も早く長谷川先輩と試合が出来るようになりたい」のが今年の目標。愛称ノリ。

昭和47年6月17日生まれ。茨城県結城市出身。趣味は音楽鑑賞。

前川久美子

165センチ、70キロ

KUMIKO MAEKAWA

高校時代に水泳をやっていたせいか背筋力はすばらしく、ブリッジは〝豊田二世〟といわれるほど。空手も初段で蹴りの威力は相当の破壊力を秘めている。

165センチ、70キロの体は、どちらかといえば〝ずんぐり・むっくり型〟で格闘技にはもってこいのタイプ。まだ、あまりワザを覚えていないため、試合は、まだ単調だが、パワフルな攻めなど将来性は十分。

ふだんは口数も少なく、おとなしいが、長時間の練習でも音を上げず、スタミナもバッチリ。クラッシュ育ての親、日本空手道塾長山崎照朝氏も「鍛え甲斐のある子だ。まっすぐ伸びていってくれれば、いい選手になるよ」とタイコ判を押している。

プロレスを志望した動機はクラッシュ・ギャルズの試合を見たのがきっかけ。だから目標も引退したライオネス飛鳥。その飛鳥が前川の試合を見て「あれほど背筋力は強くなかったが、私の新人時代によく似ている。とくに不器用な所とマジメなところが…。ワザを覚えてくると強くなると思う。今年一年が一つの勝負所だろう」といっている。

趣味は最近の若い子には珍しく「手紙を書くこと」だそうで、ちょっと〝オタク〟の感じを持たれそうだが、性格は明るくジョウダンもよく飛び出す。今年の目標は「全試合出場」試合で覚えて強くなるタイプだろう。愛称クミ。

昭和47年11月7日生まれ。千葉県佐倉市出身。

大向美智子

170センチ、64キロ

MICHIKO OHMUKAI

オーディションに合格しながら、入寮前の自主トレーニング中に右足ジン帯を切断、入院、手術などで、やっと全快したのが11月。退院と同時にビッコを引きながら2ヵ月遅れで寮に入ったが、足の故障のため、トレーニングも十分に出来ず、プロテストの合格も一番最後になってしまった。

170センチ、64キロの体に、16才という若さ。足の故障が響いてトレーニング不足がスタミナ不足という問題を残していたが、足の全快と共にピッチも上がってきた。

松永高司全日本女子プロレス代表取締役会長は「体も、また大きくなりそうだ。本人は足の故障から同期生の中で一人取り残されているような感じを持っているようだが、年も若いんだし、じっくり体造りをしてからでも遅くない。それだけの素質のある子だ」と将来性に大きな期待を寄せている。

引退した長与千種の試合を見てプロレス入りを決意して、中学生の身でありながら練習生として横浜から目黒の道場に日参するかたわら空手の道場にも通っていた。中学時代はバスケットボールの選手として活躍したというスポーツギャル。

目標の選手は豊田真奈美。「あのスピード豊かなレスリングは見ていて気持ちがいい。一日も早く豊田さんのようになりたい」というが、そのためにはスピード、テクニックに、いま以上の練習が要求されるだろう。愛称チャマ。

昭和50年5月30日、横浜市出身。趣味はドライブ。

'91 全日本女子プロレス大賞決定!!

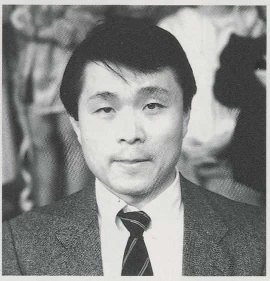
～平成3年12月9日～
於 高輪プリンスホテル

年間の優秀選手を表彰する「'91全日本女子プロレス大賞」授賞式が昨年12月9日に東京高輪プリンスホテル内プリンスルームで盛大に行われました。マスコミ各社の担当記者による投票で、別記のように各賞が決定。激動の一年を締めくくったのだった。

◆MVP（最高殊勲選手賞）
ブル中野
◆ベスト・バウト賞
平成3年9月7日 大宮スケートセンター
DWWWA世界選手権試合
ブル中野VS井上京子
◆ベスト・タッグ賞
アジャ・コング&バイソン木村
◆特別賞
山田敏代
◆敢闘賞
井上京子
◆技能賞
豊田真奈美
◆新人賞
デビー・マレンコ

オフィシャル ドクター レフェリー&リングアナ

コミッションドクター 林　督之

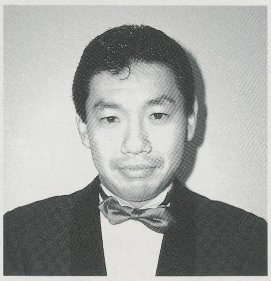


本名・林雅之。S24年12月19日生まれ、千葉市出身。51年に秋田大学医学部卒業。中央鉄道病院、同愛記念病院勤務を経て、江戸川区に「引邦医院」を開業し現在に至る。63年1月よりコミッション・ドクターに就任し、大試合ではリングサイドに待機。昨年2月にハート出版より「女子プロレス 大好き！」出版。

リングアナ 田口かほる

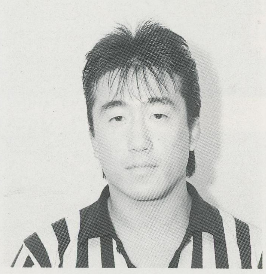
S38年5月23日生まれ、東京都目黒区出身。60年8月にダンプ松本の〝偽者〟として突如登場。その後、影かほるの名前で極悪同盟のメンバーに属していたが、自らレスラーに限界を感じ、63年12月スタッフに転身。現場では選手マネージャーを兼ねており、初の女性リングアナとして一昨年10月に初コール。

リングアナ 今井　良晴



S34年10月16日生まれ、東京都目黒区出身。学生時代から合気道やアマレスを習い始めたスポーツマンだが、その片わらバンド活動にも熱中。かつては、ダンプの〝極悪バンド〟影の存在でもあった。一昨年に入社し、昨年3月よりリングアナに抜テキされ、アマチュア時代のアイデアを生かしている。

レフェリー ボブ　矢沢



本名・松永太。S41年1月7日生まれ、東京都目黒区出身。学生時代は柔道部で活躍し、整体師の資格を習得した。60年3月に父・健司氏（社長）の跡を継いで、レフェリーとしてデビュー。激高の村山とは対照的にポーカーフェイスだが、自らの経験を生かし格闘技戦ではコーチとして選手の相談を買っている。

レフェリー 笹崎　勝己

S40年2月12日生まれ、東京都板橋区出身。平成元年10月に全日本女子プロレスの営業部に入り、宣伝活動を主に行っていたが、今年の1月に現場スタッフとなる。3月よりレフェリーとしてデビューし、前座試合を裁いているが、根が真面目なだけに厳しい態度は適任といえよう。

レフェリー 村山　大値

S39年3月20日生まれ、東京都世田谷区出身。60年11月に念願かなって全日本女子プロレスに入社。62年4月にレフェリーとしてデビューを果し、緊張感あふれる俊敏なアクションで、名勝負創りには欠かせない存在だ。その研究熱心さはマスコミ関係者も絶賛し、ユニバーサルではルチャ・リブレも裁いた。

――メンバーズ大募集!!――

女子プロレス友の会
オフィシャルFANクラブ

オフィシャルだけの特典がいっぱい

〈会員の特典〉
- ◆会員証発行
- ◆記念品（各FCごとに変わります）
- ◆共同会報「炎の青春」年6回発行
- ◆女子プロレス入場券、コンサート等イベントの優先割引
- ◆オフィシャル・ビデオの割引
- ◆秩父リングスター・フィールドの宿泊
- ◆他、常時情報提供etc.………

入会希望者は、住所・氏名・年齢・電話番号・希望するファンクラブ名（選手名）を必ず明記し、入会金千円＋三千円（会費6ヶ月分）の合計四千円を現金書留で、事務局まで申し込み下さい。

〒153 東京都目黒区下目黒2-17-17
全日本女子プロレス興業㈱内
○○○○ファンクラブ事務所
〈TEL〉03－3493－1797

OFFICIAL FAN CLUB

◆PUBLISHER
TAKASHI MATSUNAGA
◆EDITOR
ROSSY OGAWA
◆PHOTOGRAPHY & ART DIRECTOR
IKUO OHSAWA
◆PHOTO THANKS TO
WEEKLY PRO WRESTLING
◆PRODUCED BY
ALL JAPAN WOMEN'S
PRO WRESTLING

明日の輝けるスターは誰だ！
全日本女子プロレスの最新ニュースをお伝えします
〝夢を追う〟リングの主役たちにスポット
定価340円
毎週木曜日発売！
Weekly 週刊ゴング
（株）日本スポーツ出版社　東京都文京区白山2-2-6　☎03(3815)1705

ALL JAPAN WOMEN'S PRO WRESTLING

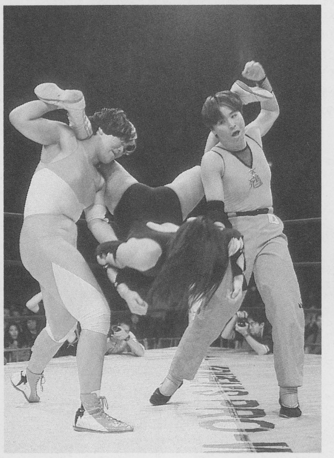
VIDEO SERIES

NOW ON SELL

タッグリーグ・ザ・ベスト'91
TAG LEAGUE THE BEST
タッグリーグ・ザ・ベスト'91
夢戦士制覇!! 3つ巴優勝戦
全試合ノーカット収録
凄絶な乱撃マッチを勝ち抜いたのは
山田敏代と井上京子だった!!
全日本女子プロレス興業株式会社
SELL or RENT
カラー 165分
定価 9,800円（税込）
VHS
AJWV-129

タッグリーグ・ザ・ベスト'91

夢戦士制覇!! 3つ巴優勝戦



〈カラー〉167分
〈定価〉9,800円（税込）

タッグ最強を決めるリーグ戦は、ブル＆北斗、アジャ＆バイソン、井上京＆山田の３強が勝ち残り、トライアングルの決戦となった…ここでもメキシコ凱旋の超星ペア、井上京と山田が素晴しき合体を披露し初優勝。新しき時代の夜明けをそこに見た！

WRESTLE MARINEPIAD '91
1991年11月21日
川崎市体育館
1991.11.21
川崎市体育館
金網タッグ私闘惨劇!!
全試合ノーカット収録！
カラー145分
定価9,800円（税込）
SELL OF RENT
〈制作・著作〉フジテレビジョン
〈発売〉全日本女子プロレス興業株式会社
VHS
AJWV-128
メキシコから凱旋!!
ハプニング続出…葬られたのはアジャだった!!

レッスル・マリンピアード'91

金網タッグ私闘惨劇!!

〈カラー〉148分
〈定価〉9,800円（税込）

伝説の死闘から早１年…女子プロレスの祭典は、またもや血に染められた〝事件〟を巻き起したのだ。金網タッグ・ストリートファイトは、アジャが腹部亀裂で戦闘不能、ブルとモンスターの仲間割れとハプニング続出。メキシコ帰りの井上京子＆山田敏代は、全日本女子イズムを爆発させ、北斗晶＆豊田真奈美を大熱闘の末、撃破した。

通信販売の申し込み方

●ビデオをご希望の方は、必ずタイトル名と本数を書いて申し込み下さい。最寄りの郵便局で、現金書留及び、払込通知票に必要事項を明記して現金を払い込めばＯＫ！

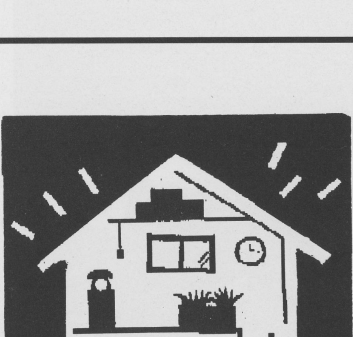
〈口座番号〉
東京０－３６８２２８全日本女子プロレス通信販売部
〒153 東京都目黒区下目黒2-17-17
全日本女子プロレス興業㈱通信販売部
〈お問い合わせ〉
03-3493-1797

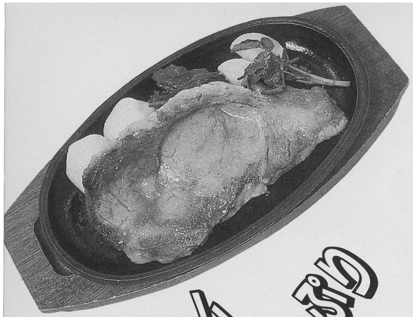
※ビデオ・カセットはＶＨＳのみです。又、送料は全てサービスします。

木のぬくもりを暮らしのなかへ……

Meeting table/Zataku/Office Accessary
Flower box/Office desk　etc.

ユーエム産業株式会社
本社：名古屋市熱田区二番一丁目11番５号
TEL.〈052〉682-3921　FAX.〈052〉682-3498





ボリュームたっぷり

登場！新メニュー

SUN zoku 族

☎(03)3493-6858
6865

ランチタイム
(AM11：30〜PM2：30)

日替りランチ＝650円
Bランチ＝730円
Cランチ＝880円
SUN族弁当＝1200円
各ライス、スープ、ドリンク付

〒153 東京都目黒区
目黒2-17-17
全日本女子プロレスビル2F

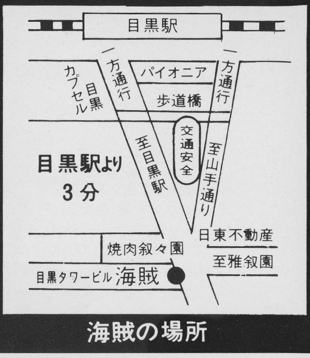
海賊

パーティ＆コンパお一人さま3,000円より受付＜女性客大歓迎！＞
目黒で一番！最新のレーザーディスクそして明朗会計
明るく楽しい夜を海賊でいかがですか？
☎(03)3493-7392
〒153 東京都目黒区目黒1-5-18 中銀ビル地下2階

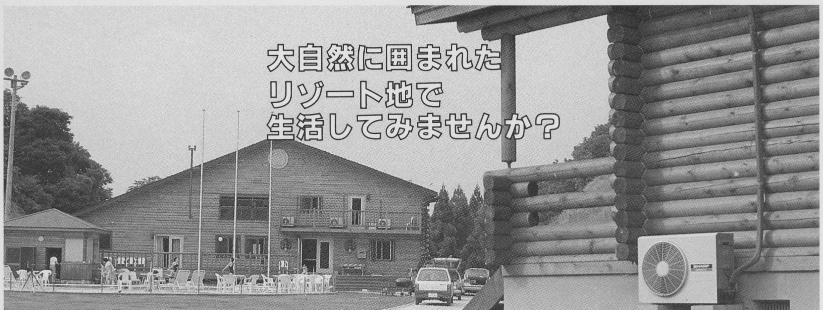
ボリュームたっぷりの海賊料理

● 牛ヒレ肉ステーキ(150g〜200g)	2,000円
● 海賊特製ヒレ肉タタキ(150g)	1,000円
● 海賊特製ハンバーグステーキ	1,000円
● 海賊特製ポテトピザ	1,000円
海賊でしか味合えない！ワニ肉タタキに挑戦してみませんか？	1,000円

急募！
★アルバイトレディ、フロアレディ、カウンターレディ
★男子ウェイター、男子カウンター、バーテンダー
20名 時給1,700円〜2,000円(寮完備)


目黒駅
一方通行
一方通行
カプセル目黒
パイオニア
歩道橋
交通安全
至目黒駅
至山手通り
目黒駅より3分
日東不動産
焼肉叙々園
至雅叙園
目黒タワービル
海賊

海賊の場所


大自然に囲まれた
リゾート地で
生活してみませんか？

プール
テニスコート
サウナ完備！

秩父リングスター・フィールド

・交通 (電車で) 池袋駅から西武鉄道秩父線秩父駅下車。タクシーで約15分です。(車で) 関越自動車道・花園ICで降り、国道140号を秩父方面に直進、大野原交差点を左折、看板あり。

・宿泊料金 1泊2食付 ¥7,500(一般) ¥6,500(会員)

埼玉県秩父市栃谷1319−10
TEL 0492-22-2443

★Ring Star Field

ALL JAPAN WOMEN'S PRO WRESTLING

HOT LINE

全日本女子プロレス情報局

0990-338-046

このサービスは、通話料とは別に3分間210円の情報料がかかります。

ホットな情報と楽しいメッセージ

① リングスター・インフォメーション〈サービス番号 51〉
ビッグマッチやイベントの情報を紹介します。もしもしクラブの選手日程はここでわかります。

② リングスター・スクランブル〈サービス番号 52〉
週刊プロレスの宍倉ジチョーが、気になる選手を直撃！これは聞き逃がせません。

③ ザ・試合結果速報！〈サービス番号 54〉
その日にあった試合の結果が、午前12時から聞ける速報です。オフィスからのマスコミ発表も、随時入っています。

④ 女子プロレス・ニュース！〈サービス番号 54〉
キャスターの寺内$\frac{1}{2}$兵衛を中心に、毎月ゲストが代わり、明るく面白いトークをー。ギャグ連発に注目だ。

⑤ スーパー・エキサイティング・クイズ〈サービス番号 55〉
選手自身が出題し、全問正解者にオリジナル・グッズを抽選で進呈！マニアの人たち、ぜひトライしてね。

⑥ 選手からあなたへのメッセージ〈サービス番号 56〉
5人の主力選手が、あなたの耳元にダイレクト・メッセージ。！

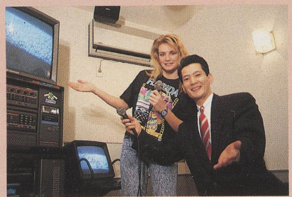
★選手と直接会話が出来るチャンス!?
全日本女子プロレスもしもしクラブ
0990-938-045
（※このサービスは通話料とは別に3分間90円の情報料がかかります。）

歌う楽しさを"独占"!!

カラオケ好きの
あなたに時間と
サービスを
提供します。

カラオケルーム しじゅうから

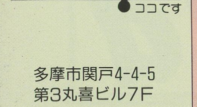
レーザーディスク&ステージ照明完備!



システム（各店共通）

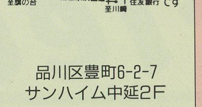
▶営業時間　正午から午前6時まで。（阿佐谷店は午前5時）
▶料金　正午から午後6時は2000円、午後6時から午前6時は3000円（いずれもワンルームに対して）。飲食は別途となります。

聖蹟桜ヶ丘店


聖蹟桜ヶ丘駅
（京王線）
至府中
至八王子
京王ストア
交番
川崎街道
ココです

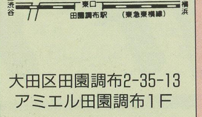
多摩市関戸4-4-5
第3丸喜ビル7F
☎0423-38-4100

中延店


至五反田
至大井町
（地下鉄浅草線）中延駅
（東急大井町線）
松の湯
中延駅
第二京浜国道
至旗の台
至川崎
住友銀行
ココです

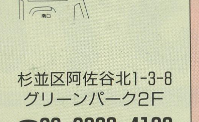
品川区豊町6-2-7
サンハイム中延2F
☎03-5702-4100

田園調布店


ルーテル幼稚園
ココです
環八通り
六間通り
住友銀行
田園調布小学校
至渋谷
東口
田園調布駅
（東急東横線）
至横浜

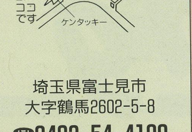
大田区田園調布2-35-13
アミエル田園調布1F
☎03-3721-4107

阿佐谷店


西友ストアー
ロータリー
三菱銀行
新進会通り
駐車場
北口
ココです。
（グリーンパーク）
中央本線
阿佐ヶ谷駅
総武線
南口

杉並区阿佐谷北1-3-8
グリーンパーク2F
☎03-3223-4100

鶴瀬店


至上福岡
東武東上線
鶴瀬駅
至池袋
鶴瀬駅ビル
2F
ココです
ケンタッキー

埼玉県富士見市
大字鶴馬2602-5-8
☎0492-54-4100

しじゅうからの姉妹店
大好評 **カラオケBOX**

ジャック&ベティー

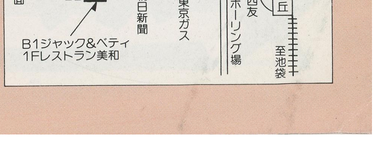
午前の部
AM10：00〜PM1：00 サービスタイム
カラオケ1曲 100円
室料無料でLDルーム全室大開放！

午後の部
カラオケ無料・歌い放題
室料（1室・1時間）何名様でも同一料金
■PM1：00〜PM6：00　1,500円〜2,000円
■PM6：00〜翌朝6：00　2,500円〜3,000円

☎0424(23)0371

・全室レーザーディスク
・最新システムの本格カラオケ

西武池袋線
ひばりが丘駅
南口
（都営住宅向い）


至田無方面
都営住宅
ココ
朝日新聞
東京ガス
南口
西友
ボーリング場
ひばりケ丘
至所沢
西武池袋線
至池袋
B1ジャック&ベティ
1Fレストラン美和

PONY CANYON INC.

NOW ON SALE

アジャ・コング、バイソン木村

(ジャングル・ジャック)

～炎の叫び～

炎の叫び
Jungle Jack

ブル中野、井上京子、バット吉永

(獄門党)

～鉄と鎖のレクイエム～

SgCD PCDA-264 SgCT PCSA-175 各¥1,000(税込)

NOW ON SALE

井上貴子

～奇蹟の扉～

Mint Showers

〔豊田真奈美、三田英津子〕

～TIME TO GO～

SgCD PCDA-256 SgCT PCSA-169 各¥1,000(税込)

奇蹟の扉/井上貴子
奇蹟の扉
井上貴子
Takako Inoue

井上貴子ビデオ
"TAKAKO夢の扉"
NOW ON SALE
30分・¥3,990(税込)
PCVP 50730

デビュー記念
ファン感謝キャンペーン

11/21・シングルCDと12/15・ビデオをお買い上げの方に井上貴子プライベートカセットを抽選で300名様にプレゼント!!
12/15・シングルCDをお買い上げの方にアジャ・コング使用サイン入り《凶器》灯油缶を抽選で100名様にプレゼント!!
※詳細は商品同封の応募用紙をご覧下さい。

今年も凄いプロレスをやるから

目を離すんじゃねえぞ!!

ATLANTA
W.W.W.A.
WORLD CHAMPION

BULL NAKANO

RINGSTAR

DEBBIE MALENKO

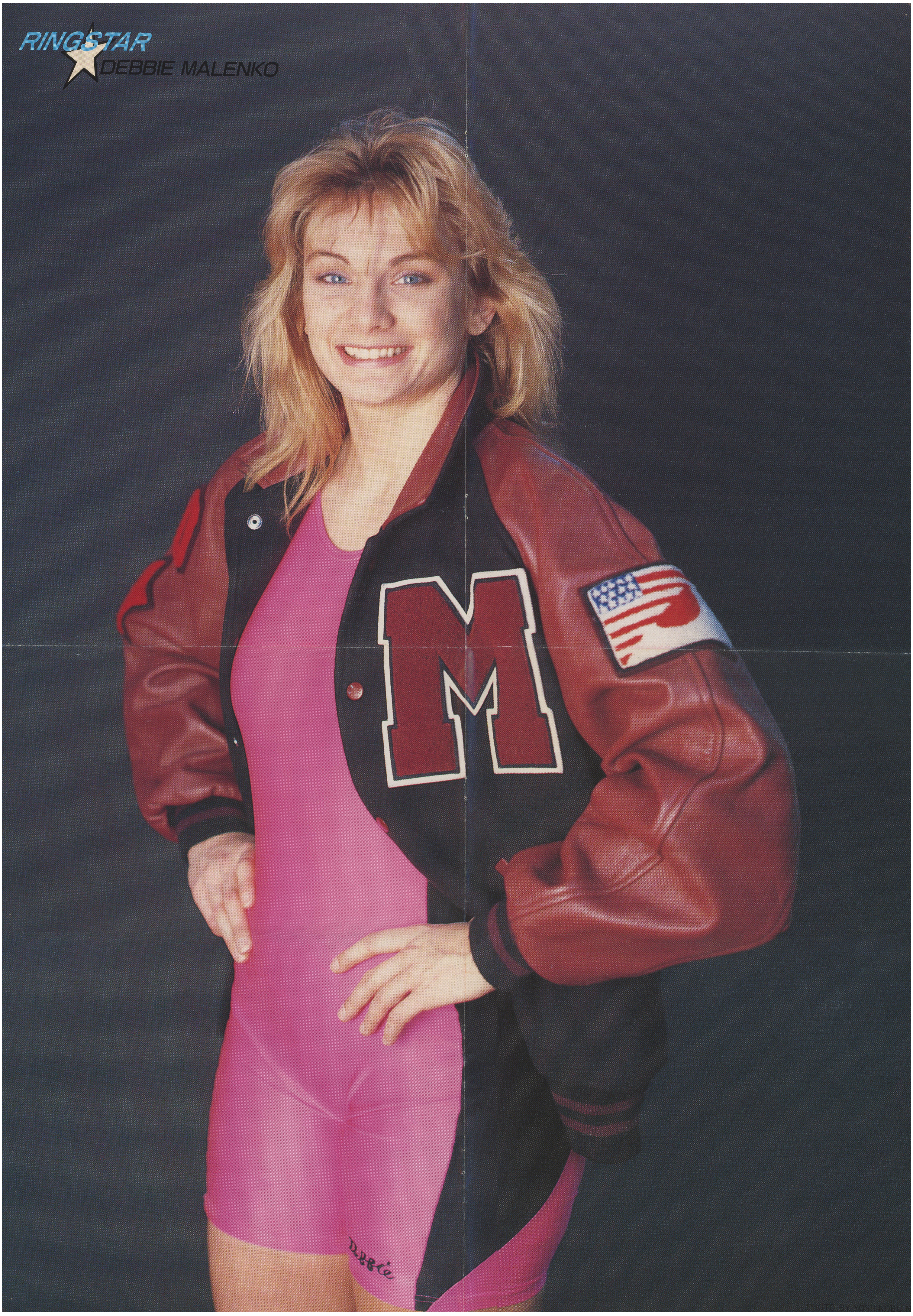
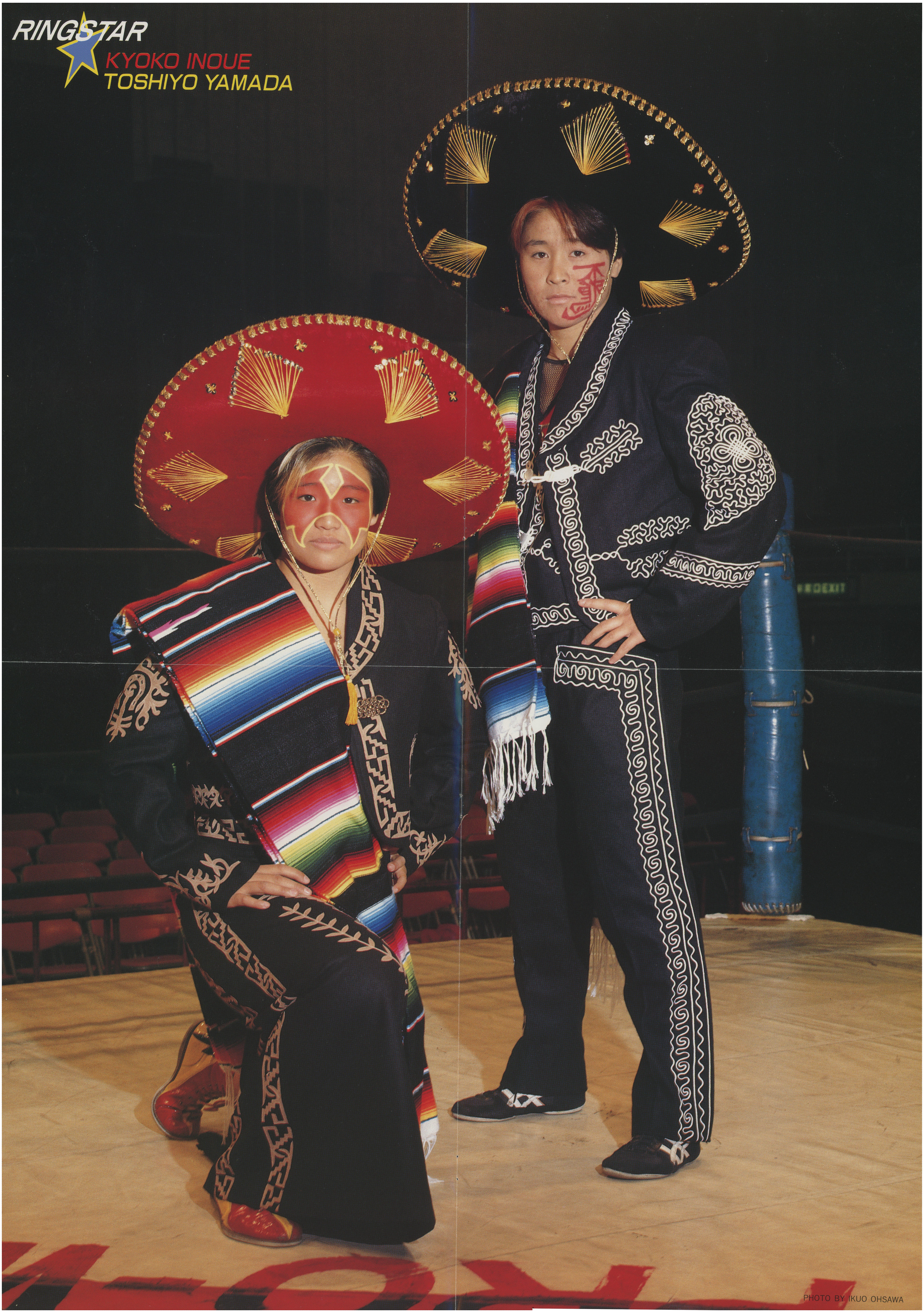


PHOTO BY YOSHINOBU N



RINGSTAR

KYOKO INOUE

TOSHIYO YAMADA

PHOTO BY IKUO OHSAWA